

第2章 轟貝塚の発掘調査史

第1節 発掘調査史の概要 (第1表)

轟貝塚は、轟式土器の標式遺跡として著名な縄文時代貝塚である。これまで実施された本貝塚の発掘調査は第1表のとおりであり、大正期の最初の発掘調査から現在まで約100年間にわたり計13次の発掘調査が行われてきた¹⁾。本貝塚は、明治32(1899)年の『地学雑誌』における佐藤傳藏による報告(佐藤1899)によってその存在が中央の学会に知られるきっかけをつくったが(木崎2015)、著名な人類学者や考古学者による発掘調査が行われたのは大正期以降である。

大正期には、大正6(1917)年、京都帝国大学(以下、京都帝大)の鈴木文太郎を中心とする京都帝大及び熊本医学専門学校(現熊本大学医学部)による発掘調査(第1次調査)を嚆矢とし、大正8(1919)年に京都帝大の濱田耕作と清野謙次を中心とする京都帝大による発掘調査(第2次調査)が行われた。さらに、大正9(1920)年には東北帝国大学(以下、東北帝大)の長谷部言人を中心とする発掘調査(第3次調査)が実施された。当時、我が国を代表する人類学者や考古学者らが、わずか数年の間に立て続けに轟貝塚の発掘調査を実施した結果、約40体(1次調査2体、2次調査18体、3次調査約20体²⁾)にのぼる多数の縄文時代人骨が出土したことで知られている。

当該期の轟貝塚の発掘調査は、明治期以降盛んとなった日本人の祖先に関する議論、いわゆる「石器時代人種論争」がその背景にあったことは疑いない事実である。我が国における人種・民族論は、明治・大正期の人類学や考古学の学会では最大の関心事であった(工藤1987)。考古学者や人類学者による古人骨の蒐集は、1910年代から1920年代にかけて全国各地で盛んに行われたが、当時の中心的論者であった京都帝大医学部の鈴木や清野、同文学部の濱田、東北帝大医学部の長谷部等、当時、我が国を代表する人類学者や考古学者が短期間に立て続けに轟貝塚の発掘調査を実施している事実からも首肯できよう。

昭和期には、昭和5(1930)年に行われた鳥居龍藏による発掘調査(第4次調査)、戦後の昭和33(1958)年、熊本大学法文学部の松本雅明や熊本県立宇土高校教諭の富樫卯三郎を中心とした発掘調査(第5次調査)、昭和41(1966)年の慶應義塾大学(以下、慶応大学)の江坂輝彌を中心とした熊本日日新聞社学術調査団(以下、熊日学術調査団)を主体とする発掘調査(第6次調査)が実施された。

第4次調査については、その詳細がよくわかっていないが、後述のとおりごく簡易的な調査だったとみられる。鳥居は、旧制熊本中学(現熊本県立熊本高等学校)の進藤坦平らの招きで1930年3月に熊本県内に滞在。轟貝塚の発掘調査を3月27日に行った(九州日日新聞社1930a)。

第5次調査は、轟式土器の型式学的分析や層位的分析、曾畑式土器との関係等を明らかにすることを目的に実施されたもので、1958年7月から8月にかけて、宇土町(当時)や宇土高等学校が調査主体となり実施された。調査は小林久雄(肥後考古学会会長)を調査隊長とし、松本や富樫が調査を主に担当した。

第6次調査は、熊日学術調査団が宇土周辺地域の古代文化に関する学術調査の一環として、慶応大学江坂輝彌講師(当時)を主査とし、昭和41(1966)年3月に実施された。調査終了後、人骨以外の出土遺物は慶応大学で保管されていたが、後に宇土市へ移管された。これに対し、人骨資料は調査担当者の一人であった小片丘彦が所属していた新潟大学医学部で当初保管されていたが、後に長崎大学医学部へ移管されている。

平成期には、平成15(2003)年度から平成17(2005)年度にかけて宇土市教育委員会が轟貝塚周辺の測量調査と貝塚の保存目的の範囲確認調査(第7・8次調査)を実施するとともに、調査報告書を刊行した(宇土市教育委員会2005・2006)。さらに、平成19(2007)年度には、江坂らが行った第6次調査の調査日誌等

第1表 轟貝塚発掘調査年表

調査次数	調査年	調査主体者等*	調査内容・成果等
—	明治31 (1898)	佐藤傳藏 (東京帝国 大学理科大学)	明治31年夏、佐藤は轟貝塚を踏査し、翌年にその成果等について『地学雑誌』に報告 (佐藤1899)。轟貝塚の調査研究の嚆矢に位置付けられ、当時の考古学者や人類学者にその存在が知られるきっかけをつくった。
第1次	大正6 (1917)	京都帝国大学 (鈴木 文太郎)、熊本医学 専門学校 (川上漸・ 山崎春雄)	男女各1体の人骨が出土。男性人骨は頭蓋を除けばほとんど全身が残っていたが、女性人骨は頭蓋骨の一部を復元できたものの、その他は多く破片であり、わずかに肢骨の一部が残存するのみであった。当該調査の成果については、鈴木1918aと1918bで報告されているが、土器や石器等の遺物の報告がなされていないことから、当初から古人骨の採取を目的とした調査とみられる。出土した人骨は、京都大学において保管されている。
第2次	大正8 (1919)	京都帝国大学 (濱田 耕作・清野謙次・榑 原政職)	調査者の濱田は、貝殻の散布状況から、貝塚の範囲を約1町 (約109m) 四方近くに広がることを想定した。調査区を第1次調査地点隣接地に設定。土器 (塞ノ神式・轟式・並木式等)、石器 (石鏃・石匙・打製石斧・磨製石斧・石錘等)、貝輪、人骨18体が出土 (濱田・榑原・清野1920)。近年実施された当該人骨の炭素14年代測定の結果、早期末から後期初頭までの人骨が混在していることが明らかとなった (山田・日下・米田2019)。出土遺物及び人骨は、京都大学において保管されている。
第3次	大正9 (1920)	東北帝国大学 (長谷 部言人)	当該調査の報告書は未刊行であるが、人骨約20体や若干の遺物が出土したことが、京都帝国大学の発掘調査報告 (濱田・榑原・清野1920) の「附記」に掲載。平成29年度に宇土市教育委員会が実施した京都大学における轟貝塚資料調査において、当該調査で作成した轟貝塚調査区配置図及び出土遺物の略図が記された図面と出土遺物 (石器・貝輪・装身具等)を確認した。出土人骨については、東京大学において保管されている。
第4次	昭和5 (1930)	鳥居龍藏 (國學院大 学等)	昭和5年3月、鳥居は旧制熊本中学 (現熊本高校) の進藤坦平らの招きで熊本県に滞在し、県内の遺跡を巡検及び調査を実施。轟貝塚の調査では、当時の新聞報道で鯨骨が出土したとされるが、詳細は不明。
第5次	昭和33 (1958)	宇土町 (当時)・宇 土高校 (松本雅明 〔熊本大学〕・富樫 卯三郎〔宇土高校〕 ほか)	一部のトレンチで、貝層を含むプライマリーな堆積状況を確認。出土した轟式土器の型式学的な検討の結果、轟式土器をA式～D式に分類するとともに、層位関係による編年を行った (松本・富樫1961)。轟A・B式、C式の一部を共伴した石器等から縄文時代早期に位置付け、C式の多くやD式は縄文時代前期と想定した。出土遺物は、熊本大学に保管されている。
第6次	昭和41 (1966)	熊日学術調査団 (主 査：江坂輝彌〔慶應 義塾大学〕、小片丘 彦〔新潟大学〕ほ か)	熊本日日新聞社が中心となって組織した熊日学術調査団が、宇土・不知火地方の古跡学術調査の一環として実施。多数の研究者が参加した。調査の結果、縄文早期から晩期初頭まで縄文土器が出土し、中期後半の阿高系土器群と後期の磨消縄文系土器群を含む貝層の存在を確認した。人骨が8体 (うち1体は中世) 出土し、1号人骨から食物残渣を検出。調査終了後、出土遺物 (人骨除く) は慶應義塾大学に保管されていたが、平成13 (2001) 年に宇土市に移され、平成19 (2007) 年度に宇土市教育委員会が再整理報告書を刊行した (宇土市教育委員会2008)。その後、寄贈を受けて宇土市教育委員会において保管している。
第7次	平成16 (2004)	宇土市教育委員会	貝塚の範囲確認を目的とした調査。計4か所のトレンチによる調査とそれ以前の調査結果に基づき、貝塚の範囲が、北西-南東方向に約120m、北東-南西方向に約60mの範囲内に限定されることが判明。また、周辺の貝の散布状況と混土貝層から出土した縄文土器から、貝塚推定範囲の外側に二次堆積層の広がりを想定した。
第8次	平成17 (2005)		貝塚周辺における集落跡 (居住域) の所在確認のための調査。貝塚の北側から北西側・西側にかけて計7か所のトレンチ調査を行ったが、一部のトレンチから若干の遺物が出土した以外は、縄文時代の集落を示唆するような痕跡は発見されなかった。 ※調査の詳細は、本書にて報告。
第9次	平成23 (2011)		
第10次	平成24 (2012)		
第11次	平成25 (2013)		
第12次	平成26 (2014)		
第13次	平成27 (2015)		
	平成28 (2016)	貝塚中心部の堆積状況の確認と過去の調査の再検証を目的として、第1～3次・6次調査地点周辺で発掘調査を実施。その結果、第2次調査区下層で、早期から前期の遺物包含層と集石遺構、焼土を伴う土坑等、縄文時代早期～前期の生活痕跡を初めて確認した。また、当該期の人骨計5体が出土した。 ※調査の詳細は、本書にて報告。	

※調査者の所属先は、調査当時を示す。

の記録物に基づき宇土市教育委員会が調査報告書を刊行した（宇土市教育委員会 2008）。平成 23（2011）年度からは、保存目的の発掘調査を再開し、平成 25（2013）年度まで貝塚周辺部の発掘調査（第 9～11 次調査）を行うとともに、平成 26（2014）年度から平成 28（2016）年度には、貝塚中心部において京都帝大及び慶応大学の調査区における再調査と当該調査区を部分的に拡張した発掘調査（第 12・13 次調査）を行った（宇土市教育委員会 2017）。

本章では、上述した佐藤による轟貝塚の報告内容や、これまで実施された大正期から平成期までの発掘調査の概要について、学史的視点を交えて整理したい。

第2節 明治期の報告

第1項 轟貝塚の“発見”

熊本県出身の地質学者佐藤傳藏による轟貝塚の報告（佐藤 1899）が、学会誌に掲載された本貝塚に関する初めての記述である³⁾。佐藤が轟貝塚を訪れたのは、明治 31（1898）年の夏であり、後述する京都帝大の鈴木文太郎らによる大正 6（1917）年 5 月の発掘調査（第 1 次調査）の約 20 年前のことであった。

第2項 佐藤傳藏による報告内容について

明治 32（1899）年に刊行された『地学雑誌』11-1（東京地学協会）において、佐藤は「九州に於ける石器時代人民」と題し、轟貝塚を含む熊本県の石器時代遺跡を報告した。

佐藤は本報告の冒頭において、「九州に土器石器を遺したる人民は、関東奥羽地方に石器土器を遺したる人民と同じきものなるか、抑亦相異なる者なる乎、是れ日本の先史人類に関する極めて重要なる問題なり」と問題提起し、「九州と奥羽若くは九州と関東と云へば、既に地理的距離に於て甚しく相距れるが、此等諸地方に於て石器土器を遺したる人民の棲息せる時代に於ける事は第二の問題として、其人種は果して同一なりや、將た亦相異なるれりや、是れ余の述べんと欲する所なり」と記述している。このことから、本報告の主題は、明治期以降、学会で盛んに議論されていた石器時代日本人種論に関係する内容であり、九州（熊本県）出土の土器や石器、骨角器のあり方と関東地方等との比較を通じ、日本における石器時代人の特徴を明らかにしようとして試みた。その具体的事例のひとつとしてあげられたのが、轟貝塚とその出土品だったのである。

以下、轟貝塚に関する記述を抜粋する。

「近比発見せられたる彼の石器時代遺物発見地名表にも載り居らざる遺跡は、肥後の国宇土郡轟村に在り、轟村は熊本市の南三里余の所に在り、清水の湧出する所なれば、熊本市街の人士は納涼に行くこと甚だ多し、其側に一大塚あり、現今の切断面を見るに、上部は之を覆ふの土は殆んど無く、貝塚を露出し、其厚さ殆ど六尺に達す、貝の種類は、かき、あかゞひ、はまぐり等にして関東地方の貝塚と別段異なることなし、其介殻の多量なる昨年より今日に至るまで、尚石灰を取るために貝を焼きつゝありて、此後も尚此石灰業を永續するの見込ある程なり、此の如く貝殻の分量は多量なるも、其割合には土器石器の分量少なく、彼の椎塚（常陸）より介殻と共に沢山の遺物を出すか如きことなし余は暫時此貝塚を穿鑿したる後、漸くにして土器の破片若干を採集したるが、石器もまた同様に少なし、然れども其種類及び土器の模様に至ては甚だ面白きものあり」と記述している。

このように、轟貝塚の地理的環境や貝塚の内容等が簡潔にまとめられており、貝が著しく散布した状態であったこと、貝を含む土層の厚さが 6 尺（約 180 cm）におよび、貝の種類はカキやアカガイ、ハマグリ等で、多量の貝が出土すること、昨年より石灰を得るために貝が採取されていたが、今後も石灰業が続けられるほどの多量の貝が現地に存在したこと等、当時の本貝塚の状況を知ることができる。さらに、「暫時此貝塚を

穿鑿」という記述から、場所は特定できないが試掘的な発掘も行ったとみられ、その結果、土器や石器の出土は少なく、椎塚貝塚（茨城県稲敷市）のように沢山の遺物を出土するような状況ではないことを記している。

また、「石器としては石斧石鏃の外に関東地方に少なき石匙を出すなり、又合志群（ママ）黒石村の遺跡よりも見事なる石匙を出せり（第三図）併し其形ち奥羽地方の者と少しく異なれり、奥羽には扇形の者多きも、此轟村及黒石村より出せるものは多少横に長し、然とも決して之を製造使用したる人種の異なる証となす如き甚しき差異にあらず、又土器の模様においても関東地方より出す者と、全く同一の者あり、第六図は轟村の貝塚より余か採集せるもの、之を第七図に示す常陸国椎塚より出たるものと相對照せよ、吾人は其間に些少の差をも見出す能はさるなり、されは関東地方に石器土器を残したる人民と、九州肥後に石器土器を遺したる所の人民とは、其の趣味好悪を同ふせりしと云うを得べく、彼等は全く同一人種なれりと云うを得べし」と記している。

関東地方と九州（肥後）における石器や土器の考古学的な比較検討を通じて、「彼等は全く同一人種なれりと云うを得べし」とし、文末において「要するに九州石器時代遺跡は性質は、関東奥羽地方の遺跡と、大体において変らぬこと、及び其の石器土器を製造使用したる所の人民は、要するに同一人種に属するものなることを、断言せんと欲するなり」と結論付けている。

佐藤の報告から2年後の明治34（1901）年に刊行された『日本石器時代人民遺物発見地名表』第3版（東京帝国大学）には、「同（宇土）郡 轟村西岡古城ノ麓貝焼場貝塚 打製石斧、石ヒ、骨器、牙器、土器、人骨 佐藤傳藏 野中完一 報」とあり、第2版には掲載されていなかった本貝塚と出土遺物が明記されている⁴⁾。ここで注目されるのは、佐藤の報告では記載がない「人骨」が明記されていることである。このことは、結果として後の古人骨の蒐集を主たる目的とした大正期の発掘調査につながったともいえよう。

このように、佐藤の報告は轟貝塚における調査研究の嚆矢として極めて重要であり、その記載内容から石器時代人種論がその背景にあったことは確実といえる。さらに本報告が『日本石器時代人民遺物発見地名表』第3版への轟貝塚の掲載へとつながり、本貝塚の存在が当時の中央の学会に知られるきっかけとなったことから学史的に大変重要な文献であるため、本書の付編2に再録した。

第3節 大正期の発掘調査

第1項 第1次調査

（1）調査に至る経緯（第5図）

大正6（1917）年5月、鈴木文太郎を中心とする京都帝大及び熊本医学専門学校により発掘調査（轟貝塚第1次調査）が実施され、男女各1体の人骨が発見された⁵⁾。鈴木は調査の翌年、兩人骨や岡山県笠岡市津島貝塚、大阪府藤井寺市国府遺跡の出土人骨と、現代日本人や現代アイヌ人との人骨の計測値の検討を通じて我が国の石器時代人について論じた（鈴木1918a・1918b）。

鈴木らが轟貝塚発掘調査の実施に至った経緯については、大正6（1917）年4月、熊本医学専門学校の川上漸と山崎春雄が轟貝塚の踏査中に貝層から人骨を発見し、そのことを川上が手紙で鈴木に報告したことがきっかけとなり、その翌月には鈴木らが本貝塚の調査を行ったとされている⁶⁾。このことについて、鈴木は「熊本県宇土郡轟村貝塚にて同地方庁の特別の厚意と熊本医専の川上、山崎両学士の案内と助力とに由り人骨を採集」（鈴木1918b）と記している。なお、大正6年6月30日付けの九州日日新聞の記事には、「県下宇土郡轟村字宮の庄に貝塚の在る事は世に知る人多き所なるが」（九州日日新聞社1917b）と記載されており、この頃には轟貝塚は一般に広く知られた存在であったことがわかる。

清野によれば、「此貝塚で初めて人骨を発見し、我等をして発掘せしむるに至らしめた第一の功労者は、元熊本医学専門学校に教授して居て、今日慶應医科大学の教授して居る川上博士である。同級生で僕の親友たる川上君は、大正六年四月今の北海道帝大医学部教授の山崎氏と轟に散歩して地層の断面から人骨の露出するのを見付けた。其れで京大解剖学の故鈴木博士に手紙を送つて、同博士は出張して三体（正確には二体一筆者補記）掘り出した」（清野 1925）とあり、大正6年4月、川上と山崎が轟貝塚において地層断面から人骨が露出しているのを発見し、鈴木にそのことを手紙

宇土轟の貝塚発掘

帝大鈴木教授の出張 人骨二人分

熊本縣宇土郡轟村大字宮の庄は全區殆んど貝塚にて先年區長前田利平氏方屋敷裏の地引下げをなしたる際鹿の角土器

◆其他數種を發掘したる

事あり貝塚として其儘保存し居れるが去廿六日帝大醫科大學教授鈴木文次郎氏は熊本醫學教授川上、山崎兩氏並に矢野縣屬と共に宮の庄に出張し先藤田氏方屋敷内の貝塚を發掘したるに同地の貝塚は最も古く其貝は全部蠣殻のみにてステツキの先きにて搔き廻せば

◆ザラくと掘り出され

何の手数も入らず四日間熱心に發掘を續けたる結果一昨日に至り人骨二人分

◆極めて珍らしき事にて

人類學研究上に裨益をなす所多かるべく予が先年某所に於て貝塚を發掘せし際の如きは約一週間を費して漸く人の爪程もなき小さき骨を手に入れたるに過ぎず夫れも人骨か獸骨かすらも判別し難きものなりしが

◆今回發掘したる人骨は

實に珍らしきものにて愉快に堪へず喜び居れり

第5図 鈴木文太郎らの調査を伝える新聞記事（九州日日新聞社 1917a）

で伝えたことが、轟貝塚の第1次調査のきっかけとなったことがわかる。おそらく「地層の断面から人骨の露出」していたのは、鈴木らの調査地点付近の斜面と考えられる。

なお、鈴木らの調査の動向は、当時の新聞で報道された。「九州日日新聞」大正6年5月31日付け記事には、「去二六日帝大医科大学教授鈴木文次（ママ）郎氏は熊本医專教授川上、山崎兩氏並に矢野縣屬と共に宮の庄に出張し先藤田氏方屋敷内の貝塚を發掘したるに同地の貝塚は最も古く其貝は全部蠣殻のみにてステツキの先きにて搔き廻せばザラザラと掘り出され何の手数も入らず四日間熱心に發掘を續けたる結果一昨日に至り人骨二人分を掘り出したるは極めて珍らしき事」（九州日日新聞社 1917a）、「貝塚を發掘し下層より土器石器と共に殆んど完全とも云うべき人骨を発見」（九州日日新聞社 1917b）と調査時の様子が報道された。

(2) 調査の概要

轟貝塚は、宇土半島主峰の大岳（477.6 m）系の山塊より東側に向けて舌状に派生した標高4～7 mの台地先端部に位置する。鈴木は、この台地の東端に調査区を設定した。京都帝大報告（濱田・榊原・清野 1920）には、鈴木が調査した地点が示されており、調査面積は12尺×12尺（約13 m²）であったことがわかる。

鈴木による轟貝塚に関する報告は、大正7（1918）年刊行の『人類学雑誌』第33巻第3号掲載の「肥後轟貝塚河内道明寺等にて發掘せる人骨に就いて」（鈴木 1918a）と、同じ年に刊行された『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第2冊に収録された「河内国府肥後轟貝塚等にて發掘せる人骨について報じ併せて石器

時代の住民に及ぶ」(鈴木 1918b)である。両書の刊行年月日は、前者が「大正7年3月25日」、後者が「大正7年3月31日」とほぼ同時期であり、記載内容や人骨を計測した表についても共通する部分が多い。

このうち、後者は轟貝塚や津雲貝塚出土の頭蓋骨の写真や断面図、国府遺跡出土人骨の大腿骨や脛骨の断面図が掲載されているが、前者には掲載されていない。また、後者はその表題のとおり、後半部分は我が国の石器時代の人種に関する私見が述べられている。両書における轟貝塚に関する記述内容はほぼ同一であるが、以下では、鈴木 1918b に記載された轟貝塚に関する報告を転載する。

「熊本県宇土郡轟村にて獲たる主要なるものは該地貝塚にて余躬ら発掘せるものなり、此人骨は男女の二軀と是より以前に同一地にて川上、山崎両氏の発見せられたる頭骨破片、肢骨其他同地小学校に在りたるもの等若干とあり、内男骨は頭蓋を除けば殆んど全身のもの具足し女骨は頭蓋の一部は復旧するを得たるも、残余は多く破片にして、僅かに肢骨の一部具存するに過ぎず、概して同地採集の人骨は男女俱に造構繊弱なり、男骨に就いては頭骨、手骨及び足骨を除けば、殆んど計測せるも、対比資料を欠くを以て、今は其一部の数を示すに止む。」

この記述から、発掘調査によって男女各1体の人骨が出土したこと、また、本調査以前に熊本医学専門学校の川上、山崎が同一地点で発見した頭骨破片等、同地の小学校(轟貝塚近くの旧轟尋常小学校と推定)で保管されていた人骨等を鈴木が入手したことがわかる。出土した男性人骨については、頭蓋を除けばほとんど全身が残っていたこと、女性人骨は、頭蓋骨の一部を復元できたが、その他は多く破片であり、わずかに肢骨の一部が残存するだけであったこと、総じて轟貝塚で採集された人骨は、男女ともに不完全な状態であったことがわかる。また、土器や石器等の遺物の報告が一切なされていないことや、調査の発端からみても、鈴木による発掘調査は、当初から古人骨の蒐集のみを目的としたものであった可能性が極めて高い。なお、これらの人骨は京都大学(以下、京大)理学研究科自然人類学研究室にて所蔵されている(付編1-2参照)。

また、当該報告において特筆されるのは、「石器時代人コロボックル説」を主張していた坪井正五郎の死去に伴い、大正期には定説の位置を獲得していた東京帝国大学(以下、東京帝大)医学部の小金井良精に代表される「石器時代人アイヌ説」を、鈴木が強く批判している点である⁷⁾。このうち、轟貝塚に関する部分については、轟貝塚や国府遺跡出土人骨の埋葬姿勢は、仰臥で下肢は膝関節を屈折、つまり仰臥屈葬であり、膝を立ててあたかも蹲踞の姿勢を彷彿とさせるもので、上肢は肘関節を屈折し、両手互いに組んで胸の上に置いているが、これは津雲貝塚のものも同じであり、現代アイヌ人の埋葬方法と相違することを指摘した。

このように、調査の背景に石器時代人種論が関連しており、学史的に重要な調査であることから、本書の付編2において鈴木 1918b を再録した。

第2項 第2次調査

(1) 調査に至る経緯

濱田耕作、清野謙次ら京都帝大による発掘調査(第2次調査)は、第1次調査から約2年後の大正8(1919)年12月17日から同23日にかけて実施された(濱田・榊原・清野 1920)⁸⁾。

当該調査の経緯について、濱田は調査報告書に「大正六年五月京都帝国大学教授医学博士鈴木文太郎氏は熊本県属矢野寛氏の東道によりて本貝塚を調査し、其の一部を試掘して人骨三体を得られたるは、実に轟貝塚の人骨を包蔵するを明にせられたる嚆矢なりとす。京都帝国大学助教授医学博士清野謙次氏は乃ち余に謀るに本貝塚の発掘を再びし、鈴木博士の企図を継承せんことを以てせられたるを以て、更に余等は熊本県属史蹟調査会と提携して遂に大正八年十二月発掘を遂行するに至れり」と調査にいたる経緯を記している⁹⁾。

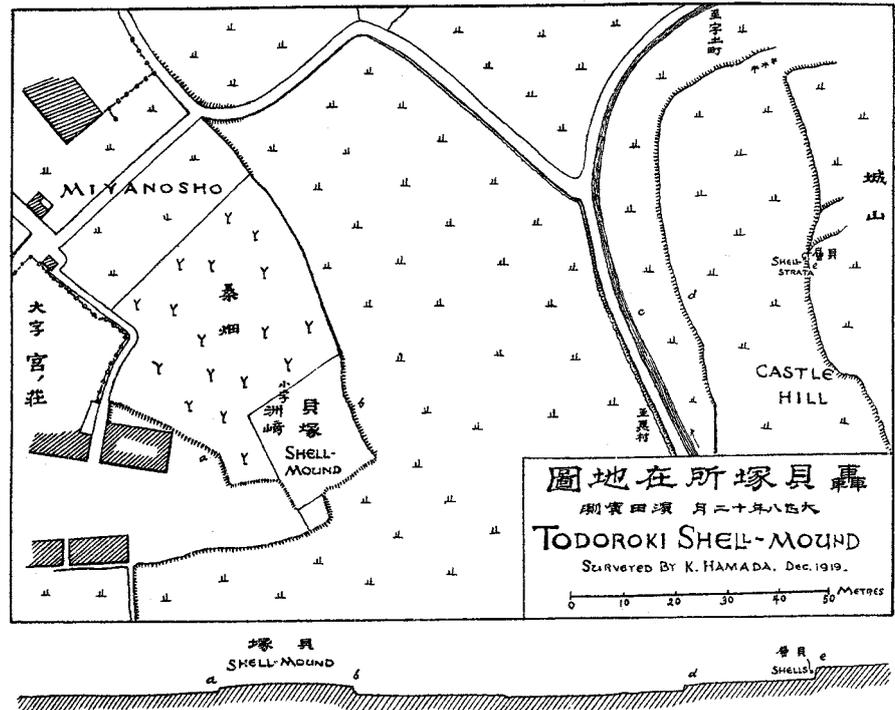
なお、濱田らによる調査は、轟貝塚において初めて行われた考古学的方法を用いた調査であることに加え、石器時代人種論争の過熱に伴い当時全国各地で盛んに行われた古人骨の蒐集に関連した調査であり、学史的

に重要であることから、付編2において本調査報告を再録した。

(2) 調査の概要

① 調査地点と層序 (第6・7図)

報告書では、貝殻の散布状況から、本貝塚の範囲を約1町(約109m)四方近く広がることを想定している。また、轟貝塚の東側に位置する西岡台貝塚についても記録にとどめており、轟貝塚との関係については、地形や貝の散布状況から、近接するものの互いに独立した貝塚との見解を示している。



第6図 轟貝塚所在地図 (濱田・榊原・清野 1920)

第2次調査においては、鈴木らが調査した地点を取り囲むようにI区からXI区まで計11区の調査区を設定した。調査面積は、調査区配置図の計測値を参考にすれば130㎡程度とみられる。

本地点における層序については、地表下約7寸は貝殻混じりの耕作土であるが、「以下二尺余は密実なる貝殻の層をなし、其以下は黒土層」と報告している。この記述や調査状況の写真から判断し、「密実なる貝殻の層」とは厚さ60cm余りの純貝層や混土貝層に相当すると考えられ、それ以下は黒色土層と理解できる。また、貝層内の所々に「焚火の跡」を確認している。

② 出土人骨 (第7・8図, 写真1)

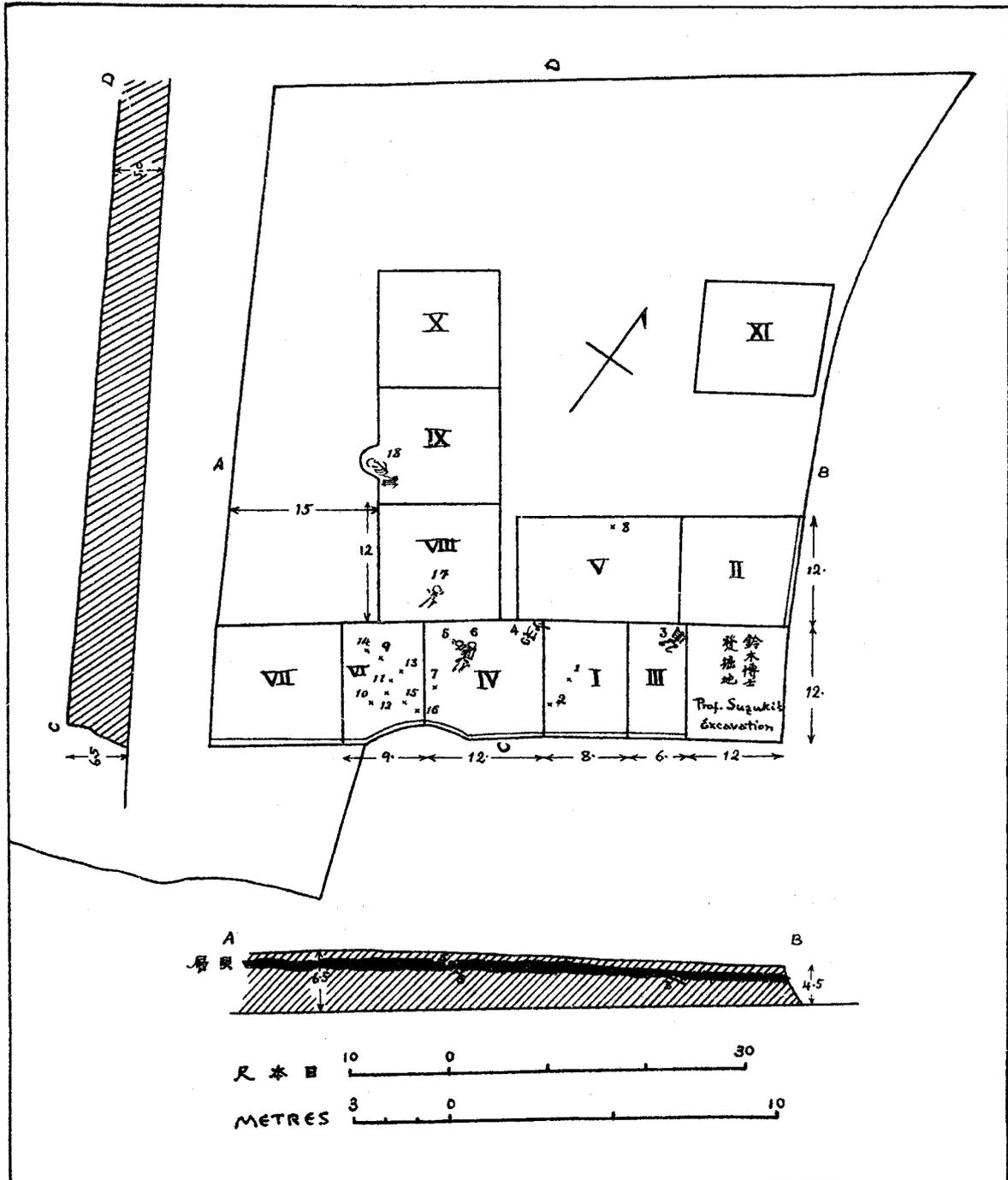
I区で散乱状態の1・2号人骨、III区の隅角でイモガイ製貝輪を右前腕に装着した3号人骨、IV区では4～7号人骨の4体が出土した。このうち、6号人骨は5号人骨(左前腕に貝輪装着)の下層で出土している。V区では乳児人骨の8号人骨が出土した。VI区では最も多い第9～16号人骨の計8体が密集状態で出土したが、10号・16号人骨等を除き、多くが部分的な部位の出土であった¹⁰⁾。その他、VIII区で第17号人骨、IX区で第18号人骨が出土した。これらの人骨は多くが屈葬であり、分布状態は著しく不規則であった。報告書においては記載がないが、出土状況から判断して土壌墓出土の人骨とみられる。

人骨はおおむね地表下2尺(約60cm)前後で出土しているが、1尺(約30cm)～3尺(約90cm)余りと幅があり一定していない。人骨18体のうち10体(1号～3号, 8号, 10号～15号)は貝層最下部より貝層下有機土(黒色土層)にわたって存在する。清野は「発掘が進みて貝層が将に尽きんとする頃に、骨格の一部が(多くの場合に於て膝関節部又は頭骸骨)が現はるゝを常とせり」と報告していることから、貝層がほぼなくなる位置(貝層最下部から黒色土層上面)で出土したと判断できる。また、18例中3例(4号・5号・18号)は貝層中、同5例(6号・7号・9号・16号・17号)は貝層下の有機層(黒色土層)で発見されている。ただし、これらは人骨の発見位置であり、厳密には墓壇の検出層位ではない点を留意する必要

がある。なお、山田康弘、日下宗一郎、米田穰が1号・3号～6号・17号・18号について、炭素14年代測定を実施した結果、人骨7体のうち、後期初頭は4号人骨のみで、主体は早期末から前期後葉であることが明らかとなっている（山田・日下・米田 2019）。

清野によれば、轟貝塚出土人骨は、津雲貝塚（岡山県笠岡市）と同じく屈位に埋葬されているが、津雲とくらべて人骨埋葬の深さは一定せず、「人骨の頭部方向が著しく乱雑にして各例大差ある」と指摘している。

また、「轟人は津雲人よりも文化の程度低し。而て貝輪の状態によりて明らかなるが如く、質実にして華



第7図 調査区配置図と出土人骨の位置（濱田・榊原・清野 1920）

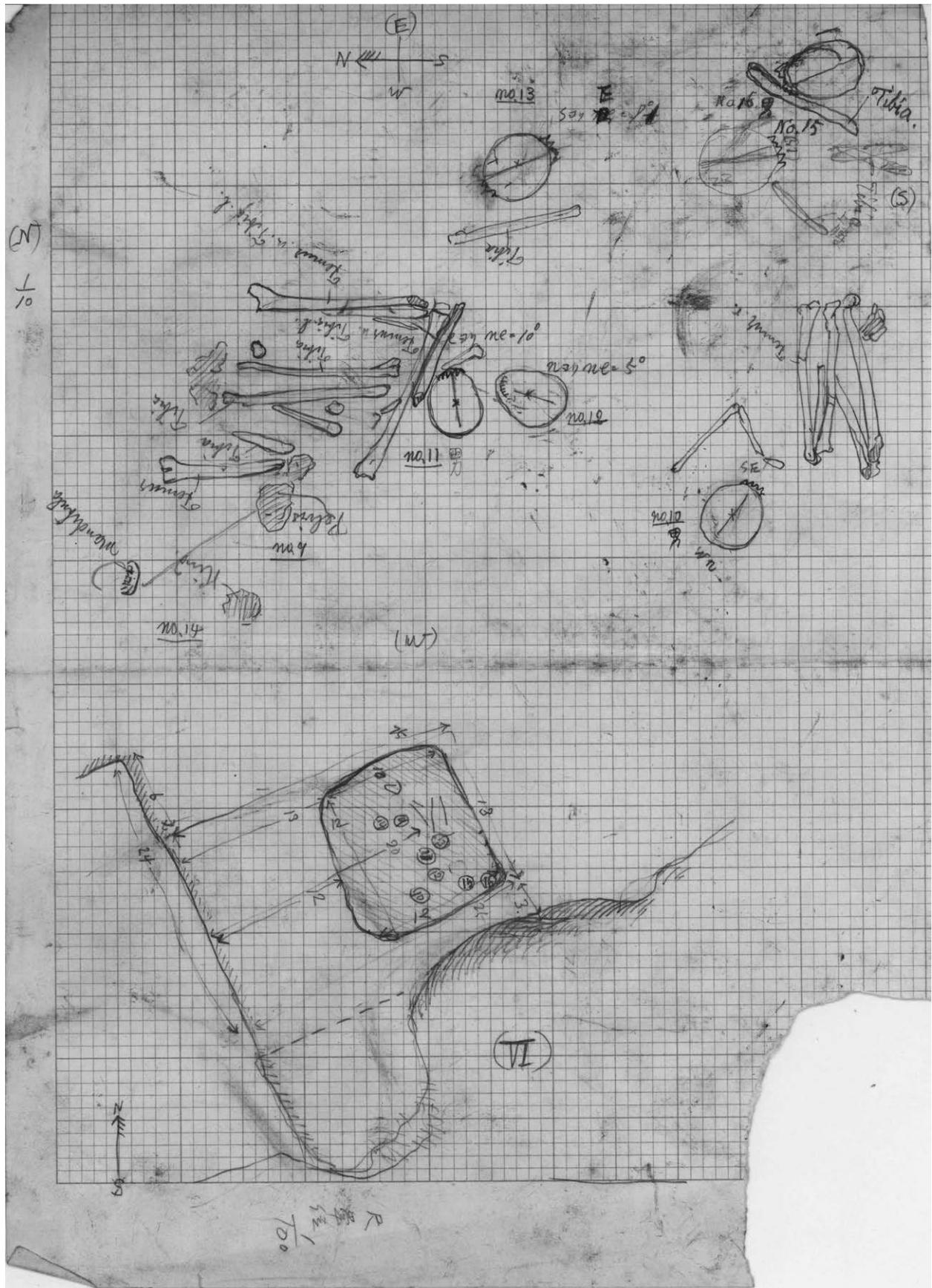
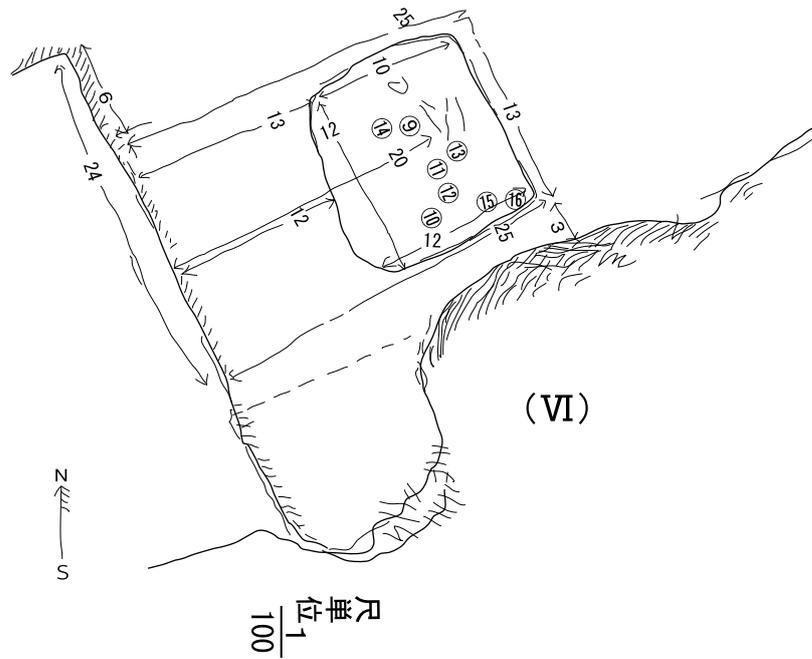
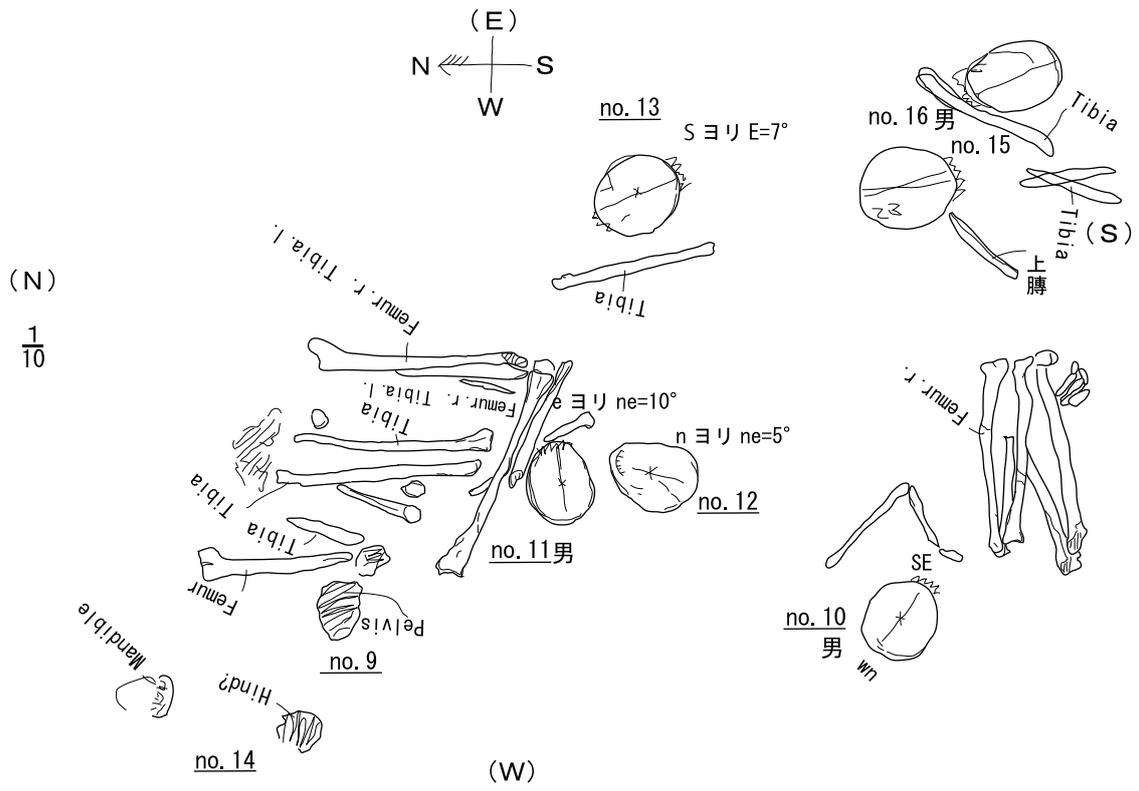


写真1 甕貝塚第2次調査VI区人骨出土状況図 (京都大学文学部考古学研究所所蔵)



第8図 轟貝塚第2次調査VI区人骨出土状況図 (写真1のトレース図)

美ならず」だが、「此両貝塚人骨は同一系統のものなり。両者の差異は数量的のものにして本態のものに非ず。而て轟貝塚の文物が低級に在るは地方的差異あるか、又は時代的差異あるものなり。両者の孰れに重きを置く可きやは、更らに進みたる研究を要す可し」と報告をまとめている。

③出土遺物

縄文土器¹¹⁾や石器、装身具等が出土したが、濱田は「石器及土器の破片等は貝層及び表土中に混在し、敢て特殊の存在状態の記す可きもの無く」と報告している。

遺物のなかで最も多くを占めるのが土器で数百点にのぼる。このうち12点は祝部土器（須恵器）に類するもの、また近代の磁器片が出土したが、これらは攪乱とみられる貝層上部から出土し、それ以外は「貝塚式土器」（縄文土器）であり、弥生式土器は出土していないと記述している。土器の破片は各調査区とも散乱した状態で比較的完形に近いものは発見できなかったという。

濱田は出土した縄文土器を文様から「(イ)隆起細帯文、(ロ)変様縄席紋、(ハ)爪形及変様爪形紋、(ニ)波線直線紋、(ホ)各種直線紋、(ヘ)刷毛及篋目紋、(ト)太形凹紋」の7類に分類した。これらについては、



第9図 京都帝大の轟貝塚発掘調査（第2次調査）を伝える新聞記事（九州日日新聞社1919）

(イ)・(ロ)・(ハ)は轟B式土器、(ニ)は轟C式土器、(ホ)は轟A式土器、(ヘ)は轟D式土器、(ト)は阿高式土器におおむね対応する。また、出土数は、(イ)が「最少量」とし、(ハ)・(ニ)・(ホ)が「多量」、(ヘ)・(ト)が「中量」、(ロ)が「微量」としており、轟B式が最も多く出土したことがわかる。また、(ハ)を「河内国府土器類似」、(ニ)を「弥生式土器類似」、(ホ)を「内に日向柏田貝塚土器類似のものあり」とし、(ト)は「阿高貝塚土器酷似」と両貝塚から出土する阿高式の存在を指摘している。さらに、(イ)・(ハ)は、「最も古拙なる性質を發揮」とし、(ニ)が新しい特徴を有することを指摘しているが、出土の層位的区別がないとしている。

石器については石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧、石錘等が出土した。また、装身具はイノシシ牙製の垂飾、第3・5号人骨の腕に装着された状態で出土したイモガイ製貝輪である。その他、貝類や獣骨等の自然遺物についても記述があり、貝類についてはアカニシ、テングニシ、ツメタガイ、パイガイ、ヤマニシ（淡水産）、ハイガイ、サルボウ、カガミガイ、ハマグリ、イタボガキ、マガキが出土し、このうちハマグリやカキの類が多くを占め、「此等は頗る大形にして、現時殆ど之を此の地方に於いて認むる能わざる」としている。獣骨はイノシシやシカが多いと報告している。

第3項 第3次調査

(1) 調査に至る経緯

大正9（1920）年7月、東北帝大の長谷部言人を中心とする発掘調査（第3次調査）が実施された。調査の組織体制は不明であるが、長谷部の他にアイヌ研究で知られる児玉作左衛門（当時、東北帝大医学部助手）が調査に参加したとされている（大矢2017）。なお、当該調査の約7か月前に京都帝大による調査状況を報じた大正8年12月27日付けの九州日日新聞によれば、長谷部は大正8年の夏、轟貝塚を訪れたが「事情があつて急遽帰東したために発掘はしなかつた」（九州日日新聞社1919）と報道されており、長谷部は京都帝大による調査の数か月前に調査を計画・実施しようとしていた可能性がある。

(2) 調査の概要

本調査の正式な調査報告書は刊行されていないが、濱田が京都帝大調査報告の「附記1」において、長谷部らによる調査の概要を次のように記している（濱田・榊原・清野1920）。

「〔附記1〕本報告書印刷中、大正九年七月東北帝国大学教授医学博士長谷部言人君は肥後轟貝塚の残余の一部を発掘し、人骨約二十体及び遺物若干を発見せられたり。就中注意すべきは、少数の弥生式土器破片を耕土層中に見出したると、骨角及石製耳飾の残欠二箇を得られたることなり、耳飾は白色大理石より成り、其の形式全く河内国府遺跡等より発見せられしものと相同じきを見るは最も重要な事実となす。同君の発掘に関する詳細なる報告は、別に発表せらるべきを信ずるも、今ま同君の厚意により、此の新事実を附記し、耳飾は之を巻首図版中に挿入するを得たるは、余輩の深く喜ぶ処なり。」

これによると、長谷部の発掘調査で人骨約20体と若干の遺物が出土し、なかでも注意すべきは少数の弥生土器が耕土層（表土）中から出土したこと、骨角器と石製耳飾¹²⁾の残欠が出土したことをあげている。この耳飾は白色大理石製で、その形式が河内国府遺跡等から発見されたものと同じであることは、最も重要な事実と評価している。

上記の人骨は、現在、東京大学（以下、東大）総合研究博物館に所蔵されている。長谷部が大正5（1916）年から昭和13（1938）年まで東北帝大に所属し、その後、東京帝大へ転出したことをきっかけに当該人骨もあわせて東京帝大へ移管されたものと推察される。なお、これらの資料は、海部陽介、中橋孝博、橋本裕子による人骨の形態学的特徴に関する研究報告において、その概要が報告されている（海部・中橋・橋本

1998。詳細は付編1－3参照)。

(3) 京大所蔵の第3次調査関連資料について (第10図, 写真2)

第3次調査については、これまで濱田の附記以外の内容については詳細不明とされてきたが、宇土市教育委員会が京大所蔵の第1次・第2次調査出土遺物や人骨資料、調査関連記録物の内容や所蔵状況等の詳細を把握するために実施した平成29(2017)年11月の資料調査の過程で、同大に第3次調査に伴い作成された図や出土遺物が存在することを確認した(詳細は付編1－2・3参照)¹³⁾。特定するに至った根拠は、次のとおりである。

京大文学部考古学研究室に所蔵されている図面(1枚)は、京都帝大による第2次調査の調査区を基準とし、新たに拡張された調査区が設定されており、I区からIX区までグリッド状に区分されて赤鉛筆でラフに着色されている。また、人骨出土地点が1～19の番号で付番され、調査区配置図の周囲には、石器や骨角器等の出土遺物のスケッチが描かれており、濱田が報告した「人骨約二十体」と合致する。さらに、京都帝大の第2次調査区に相当する部分に○印が17箇所確認できるが、これは当該調査の人骨出土地点と合致している(ただし、2号人骨出土地点にあたる位置には○印未記載)。図面左上には、「此他帰途京大考古学教室ニ提出シタル諸品アリ コヽニ記入シタルハ其内玦ニケノ所在ノミ」との記載があることから、調査終了後、京都帝大の考古学教室に「玦」等の出土遺物の一部が提出されたとみられる。この「玦」は、附記に記載された耳飾であろう。

一方、出土遺物は京都帝大の第2次調査出土資料とともに京大総合博物館に所蔵されている。上記の図面に描かれた遺物のスケッチと総合博物館収蔵品との照合を行ったところ、スケッチされた出土遺物のほとんどを特定することができた。特定した遺物の多くに上記図面の調査区との対応関係を示すローマ数字の注記や「寄託 長谷部言人氏」等と記載されたラベルが伴っている。

このような状況証拠から、上記の図面及び出土資料を第3次調査の関連資料と断定した。本図と第2次調査区配置図の計測値を参考にした調査面積は、第1次・第2次調査を合わせた面積と同程度の約150㎡とみられる。出土遺物は、石器(石鏃・尖頭器・石匙・打製石斧・磨製石斧・双角状礫器)、石錘、土錘、貝輪、骨角器(簪・骨製刺突具)で、弥生時代以降の遺物も若干含まれている(出土資料の一覧表と写真を付編1－3に掲載)。ただし、おそらく多量に出土したであろう縄文土器については、図面には一切記録がなく京大にも収蔵されていないことから、本調査の主たる目的は古人骨の蒐集であった可能性が極めて高い。

なお、人骨は約20体出土したと濱田が報告し、図面にも人骨出土地点が1～19まで番号を付してあることから矛盾はないが、東大総合研究博物館所蔵の轟貝塚出土人骨は、計34個体が報告(海部・中橋・橋本1998)されており、大きな隔りがある。この理由については、混入により同一個体が別個体としてカウントされている可能性があげられる。また、図面には1号から19号までの人骨出土地点の他、「残缺」(残欠)との記載が7箇所あり、それぞれ短い線や点でスケッチされているが、この表現手法から人骨の破片を示した可能性が高く、少なくとも計26地点から出土した人骨ととらえることができ、人骨個体数はそれ以上であったと推測される。その他、図面に出土地点を記載されずに取り上げられた人骨の存在も想定される。

第4節 昭和期の発掘調査

第1項 第4次調査

(1) 調査に至る経緯

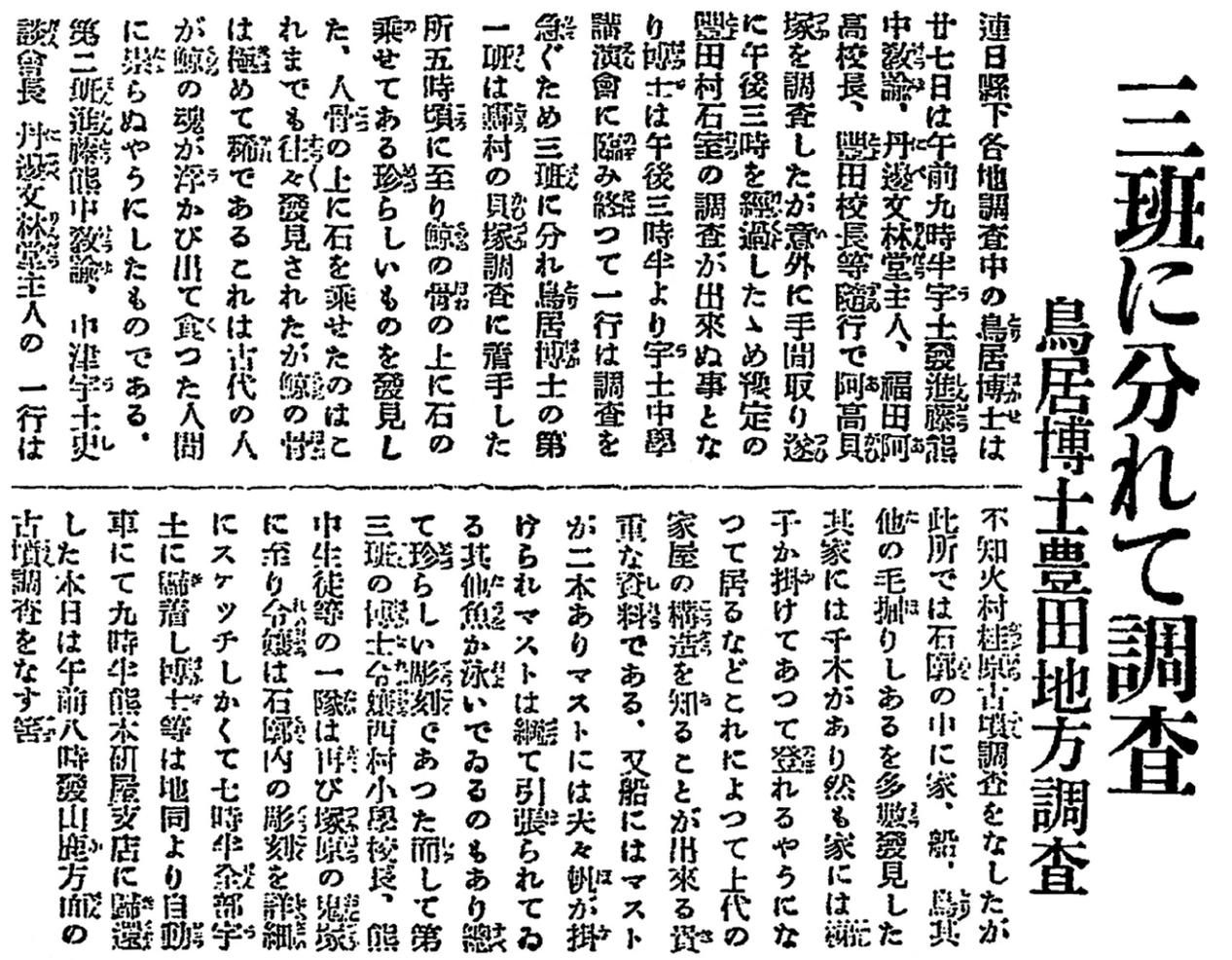
鳥居龍藏は、旧制熊本中学(現熊本高校)の進藤坦平らの招きで昭和5(1930)年3月22日から30日ま

での間、熊本県内に滞在し、県内の遺跡を巡検及び調査を行った（松本 1967）。期間中、轟貝塚の他、熊本市の立田口白川沿いの横穴墓群の調査、宇土市の曾畑貝塚、同檜崎古墳、宇城市不知火町の鴨籠古墳、熊本市南區城南町の阿高貝塚・御領貝塚等の調査を立て続けに実施した。

(2) 調査の概要

轟貝塚の発掘調査を実施したのは、3月27日午後のことである。調査地点や調査内容については明確ではないが、小規模な調査であったことは昭和5年3月29日付け『九州日日新聞』の記述から明らかである。記事には、「午後三時半より宇土中学講演会に臨み終わつて一行は調査を急ぐため三班に分れ鳥居博士の第一班は轟村の貝塚調査に着手した所五時頃に至り鯨の骨の上に石の乗せてある珍しいものを発見した。人骨の上に石を乗せたのはこれまでも往々発見されたが鯨の骨は極めて稀であるこれは古代の人が鯨の魂が浮かび出て食つた人間に崇らぬやうにしたもの」と報じている（九州日日新聞社 1930a）。

鳥居は、熊本滞在中に実施した調査成果については、3月29日に「考古学より見たる熊本県内の遺跡に就いて」という演題で、熊本市の明麗館において講演を行っている。昭和5年3月31日付けの『九州日日新聞』に掲載された記事（九州日日新聞社 1930b）によれば、本講演において我が国の石器時代人や県内外の遺跡等に言及し、「石器時代は之を二つに分かることが出来る。其一つはアイヌ遺跡、今一つは日本祖先、即ち固有日本人の遺跡である（中略）熊本に最初みたのはアイヌでありそれに次で我々祖先がみたやうであ



第11図 鳥居龍藏による轟貝塚の発掘調査（第4次調査）を伝える新聞記事（九州日日新聞社 1930a）

る。阿高の貝塚でも上部は我々祖先のもので下部はアイヌのものである。この点は宇土方面でよく見られる」と報じており、小金井良精と同様に「石器時代人アイヌ説」の論者であった鳥居の当時の認識を知ることができる。

第2項 第5次調査

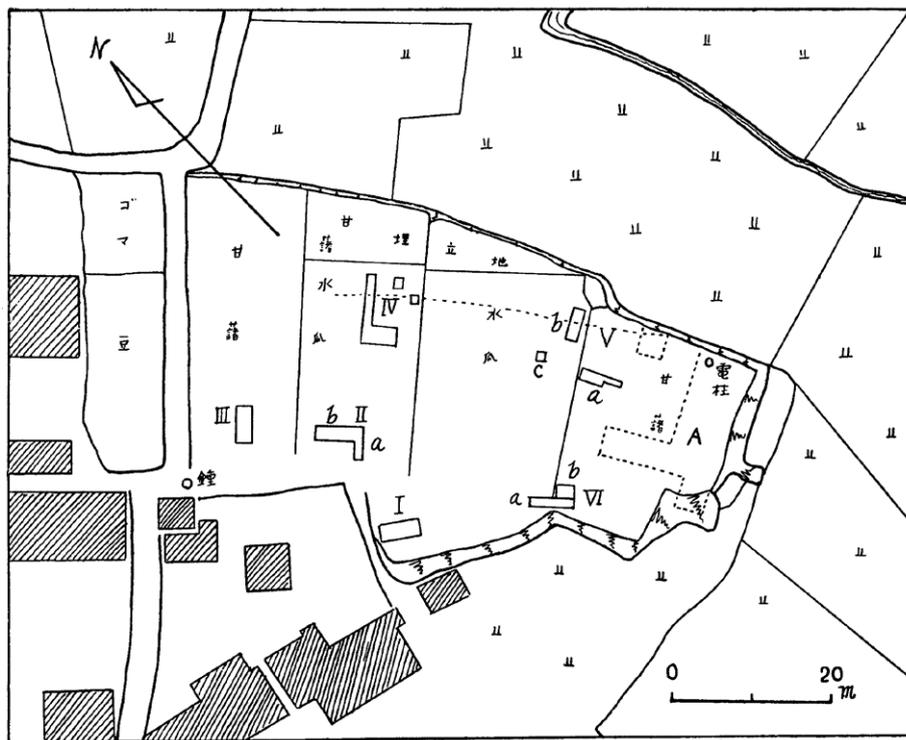
(1) 調査に至る経緯

宇土町（当時）や県立宇土高等学校が主体となり、昭和33（1958）年7月30日から同8月3日にかけて発掘調査（第5次調査）が実施された。本調査は、縄文前期の文化の性格を、貝層の層によってつきとめ、その編年の関係を明らかにすることを主な目的として行われた（松本1958）。当時、宇土町町長だった大和忠三が調査団長となり、小林久雄（調査隊長）、松本雅明、富樫卯三郎、原口長之、内野仁之助、三島格、田添夏喜、花岡興輝、東光彦、隈昭志が調査員として調査にあたり、宇土高校や熊本大学（以下、熊大）の生徒・学生らが協力した。

調査終了後、松本雅明と富樫卯三郎は、調査の内容を「轟式土器の編年—熊本県宇土市轟貝塚調査報告—」『考古学雑誌』第47巻第3号（松本・富樫1961）で発表。轟式土器をA式～D式に分類した。以下では、この調査報告の記載内容に基づき、その概要を示すこととする。

なお、当該調査で出土した轟式を中心とする縄文土器は、実測図や写真等が石器の実測図とともに、松本・富樫1961に多数掲載されたが、轟式土器の編年研究上、学史的に重要な資料であることから、当該資料を所蔵している熊大文学部考古学研究室の協力を得て、付編1～4において未発表資料を含めた遺物実測図を掲載するとともに、土器の分類や出土層位の関係等について再検討を行った。

(2) 調査の概要



第12図 轟貝塚第5次調査トレンチ配置図（松本・富樫1961）

①調査トレンチと層序

第5次調査では、京大の調査地を避けるように6つのトレンチ（Iトレンチ～VIトレンチ）を設置した。このうち、トレンチ規模の記載があるのは、II・V・VIトレンチで、IIトレンチ16㎡、Vトレンチ15㎡、VIトレンチ10㎡である。I・III・IVトレンチはトレンチ規模の記載はないが、トレンチ配置図から計測するとIトレンチ約10㎡、IIIトレンチ約8㎡、IVトレンチ約15㎡と推定されることから、調査面積は計約74㎡である。

轟貝塚(宇土)を再び発掘

「縄文前期」の解明へ

廿八日から五日間 町と高校が中心に

縄文前期の遺跡として全国的に有名な宇土郡宇土町庄の轟貝塚が同町および宇土高校共願、本社後援で二十八日から五日間にわたって発掘調査される。

同日塚は大正八年に京都大学が発掘調査し報告書を発表して以来考古学界で縄文前期の遺跡として知られてきた。

この発掘調査されるのは京都大学が開発した貝塚の一部をなすもの。同大学が発見したのは「報告」に止まっており、現在の学界は不十分なところが多いので、この開発では貝塚の性質を解明し、出土する土器の層位について検討しなおすなど、突っ込んだ研究に重点が置かれる。

調査団長に大和宇土町長、調査隊長に松谷宇土高校長、調査責任者に高松同校教諭が決まり、調査員には小林肥後考古学会長(城崎町長)、松本朋大助教(ほかに二務城花岡、藤田氏ら県下の考古学界の

権威者たちが名を連ね、宇土高校社会部生徒ら約五十人が毎日応援に出ることになっている。

▽小林肥後考古学会長の語 轟貝塚は学界でもソンの山が多い縄文前期の遺跡だけに、現在の進んだ調査方法で追究すれば数多くの収穫が期待される。例えは京都大学の報告では鉄(ケツ)状鉄鉱が出土するから古い貝塚

とされているが、現在では逆の鉄が少なくなっているが、どちらが正しいか、今度の発掘できめたい。さらに縄文土器と筒形土器の層位の関係も、この発掘でつきとめられると思う。従来前期縄文について学界で疑問とされたり不確定とされたりしていた問題がこれで解決される可能性がある。

第13図 轟貝塚の発掘調査(第5次調査)を伝える新聞記事(熊本日日新聞社1958)

調査トレンチのうち、プライマリーな状況を示すのは、Iトレンチの一部のほか、IIbトレンチの南半の混土貝層の下部以下、Vbトレンチ南半の最下層、VIbトレンチの黒土層以下の層であり、それぞれ層位は異なる様相が認められるものの、全体として統一した層位を復元することができるとした。また、IVトレンチとVトレンチの調査によって、台地北側(第12図点線より北側)が近代の埋立地であることが判明した。

Iトレンチ 第5次調査トレンチのうち、最も原初の状態をとどめるとされている。第1層は約20cmの耕土層で、各種の土器の破片が混在する。第2層は約20~25cmの厚さで堆積する純貝層である。本貝層はカキが90%を占め、そのほかアカガイ、ハイガイ、ハマグリ、アサリ等が混じる。第3層は混土貝層で、厚さ約15~23cmを測り、カキやアカガイが多い。第4層は約10cmの貝層であり、大部分はハイガイで、そ

れにカキ、アカガイ、ハマグリ等を含んでいる。この第4層直上で厚さ約15cm、広さ約1㎡の焼土層が検出された。第5層は表土下約70cmの貝片や礫を含まない純黒土層で、深さ約1mあまりでやや褐色を帯びる。第2層の純貝層では阿高式の単独出土、第3～5層では甕式土器が出土し、阿高式と甕式との間には明確に層位的区分が認められた。また、甕式のうち条痕を消したものは第3～5層上層にわたり、第5層上層で土器の表裏に強い条痕文をもつものが現れ、同下層では表裏に条痕を施したもののほか、押型文土器が出土した。

II b トレンチ 第1層は約20cmの表土、第2層は約20～30cmの貝層(ハイガイ・アカガイ・カキ・ハマグリ・アサリ・ニシ・ニナ等)、第3層は約30～40cmの黒色土層である。第3層の下層がその中でも混乱のない層とされており、甕式が単独出土した。

V b トレンチ 第1層は約15cmの黒色表土(混貝層)、第2層は約20～45cmの混土貝層(第一)、第3層は約10cmの混土貝層(第二)である。それ以下は第4層の黄褐色土層。また、トレンチの一部では第4層の下で段落ちしており、第5層の灰色粘土層が見られる。第5層は湧水が見られ、埋め立てられた湿地もしくは水田とする。なお、本トレンチから縄文後期の御領式の小児甕棺が出土した。

VI b トレンチ 第1層は約15cmの黒色表土(混貝層)、第2層は15～20cmの混土貝層、第3層は東南隅にある厚さ不明の純貝層(主としてハイガイ・カキ)、第4層は約65cmの黒色土層である。第2層は阿高式と甕式が混合し、最下層からは甕A式が出土したとされ、全体的には甕B式の出土が多かったという。

②出土遺物

多量の縄文土器の他、石器(石鏃・石匙・磨製石斧等)が出土した。特に、縄文土器は様々な型式の土器が多数出土しており、早期の押型文土器(手向山式)から後期の黒色磨研土器(御領式)まで幅広い年代の土器が出土している(土器の詳細については、付編1～4参照)。各トレンチから出土した土器は甕式が多く、貝殻条痕や施文方法の特徴から、次のように分類した(松本・富樫1961)。

A 式 最下層から出土し、表裏に強い条痕が残るもの。

B 式 条痕の上に粘土帯を貼り付けるもの(第1類:条痕の上に粘土帯をはりつけ、それを指頭でつまみ「ミミズバレ文」を形成、第2類:「ミミズバレ文」が退化し細くなったもので、表裏の条痕を意識的に消す、第3類:「ミミズバレ文」の上に貝殻で刻み目を入れ刺突の沈線に変化するもの)。

C 式 浅い条痕をのこし、波状文を主体とするもの(第1類:条痕文の上を指頭で整え、その上に波状文を施す、第2類:第1類が変化して裏面の条痕が消失、第3類:条痕は浅く、貝による刺突文、平行沈線を持つ)。

D 式 条痕がほとんど消え、他の施文方法が取り入れられるもの(第1類:短直線紋で内面にも文様を施す、第2類:列点文を施文、第3類:刺突文、直線文や波状文列や爪形文を施す)。

甕式土器が条痕文を施したのから、単純な条痕文に粘土帯貼りつけたもの、そして他文様との複合といった、文様の複雑化・複合化を変化の方向とした編年となっており、上記の層位関係に基づき、甕A式から甕D式までの連続性を想定した¹⁴⁾。

時期については、A式、B式、C式第1類の大部分は縄文早期、C式第1類の一部分、同第2・3類は、縄文前期の第1期、D式は前期の第2期に位置付けている。また、甕式のなかに明らかに曾畑式土器の影響がみられるものが出土していることを指摘し、甕式から阿高式への移行の過程、阿高式の初期の様式はとらえられないとしながらも、口縁部の刻目、ヘラによる施文は阿高式への途をひらくものとした。

以上の松本・富樫1961の報告内容や、熊大文学部考古学研究室に所蔵されている資料をみると、本調査では、押型文から黒色磨研土器まで幅広い時期の土器が出土しているが、II トレンチやV トレンチ、VI トレンチにおいて縄文早期の土器の出土が比較的多い一方、I トレンチは甕D式土器以降の土器型式の出土量が

多い。このことから、直接的な生活痕跡は確認できないものの、時期が新しくなるにしたがって轟貝塚が立地する台地のなかでも先端部の標高の低い方から山側の高い方へと遺跡内の生活場所の移動があった可能性が高く、後述する第6次調査からも同様の傾向を把握することができる。

なお、松本・富樫 1961 では、動物遺存体及び貝製品（貝輪）は未報告であったが、熊大文学部考古学研究室に所蔵されている資料を中川毅人が報告している（中川 2001）。このうち、動物遺存体は哺乳類（イノシシ、ニホンジカ、イヌ、ニホンザル、アナグマ等）、鳥類（ツル科の一種）、魚類（クロダイ、スズキ、サメ類）、貝類（マガキ、アカガイ、ハイガイ、アサリ、ハマグリ、イボニシ、ウミニナ、シオフキ、アカニシ、スガイ、ウニレイシ、テングニシ）である。哺乳類総数 211 片のうち、ニホンジカが 114 片（54.0%）と最も多く、次いでイノシシの 86 片（40.7%）と全体の 9 割以上を占めている。貝類はハイガイやアカガイが多く、これらのほとんどが砂泥に棲息する種である。

第3項 第6次調査

（1）調査に至る経緯

本調査の契機は、熊本日日新聞社が中心となって組織した熊日学術調査団が主体となり、宇土、不知火地方の古代文化に関する学術調査の一環として、慶応大学講師（当時）だった江坂輝彌を主査とし、昭和 41（1966）年 3 月 20 日から同 29 日の期間で実施された¹⁵⁾。

調査終了後、人骨以外の出土遺物は慶応大学、人骨は新潟大学医学部で保管されていたが、平成 13（2001）年、慶応大学資料については、新宇土市史編纂事業や発掘調査報告書作成のために宇土市へ移された。平成 19 年度に本調査の日誌や土層断面図等のコピー、写真等の記録物に基づき、宇土市教育委員会が発掘調査報告書を刊行（宇土市教育委員会 2008）。平成 23（2011）年には、同大から宇土市へ出土品が寄贈された。一方、人骨資料については、昭和 56～57 年頃、新潟大学から長崎大学医学部へ移管されている。

以下では、上記の調査報告書に基づき、その概要を示すこととする。

（2）調査の概要

①調査トレンチと基本層序（第 14・15 図、写真 3）

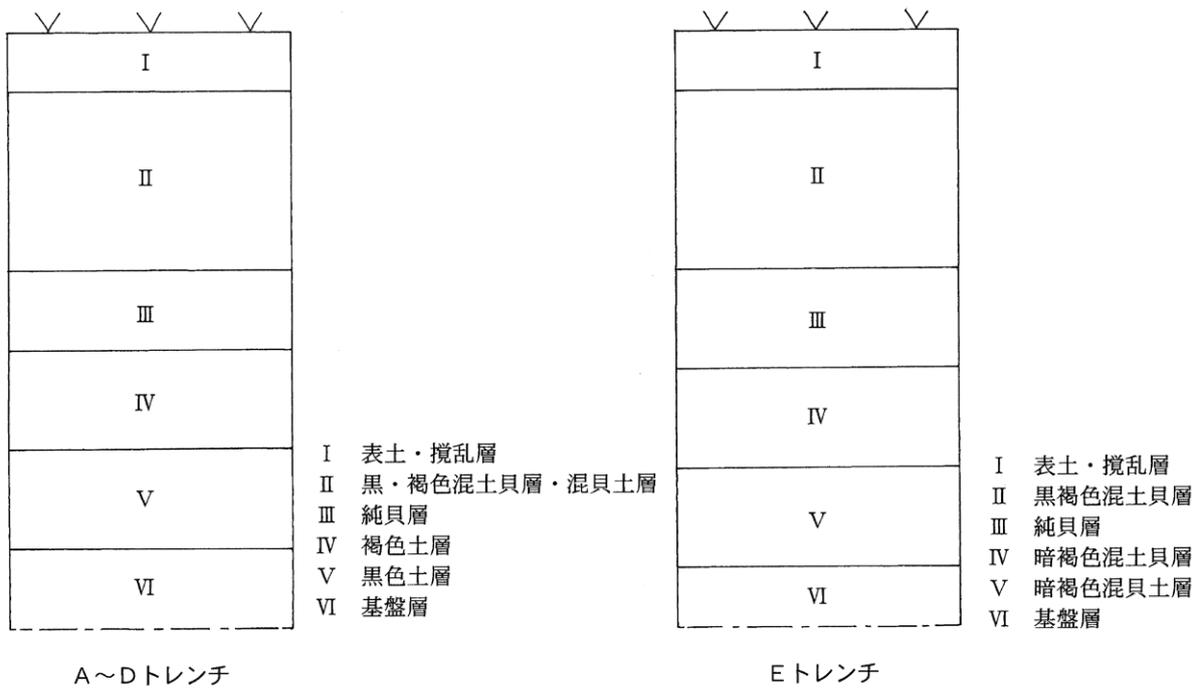
調査地は、京都帝大による第 1・2 次調査の西側一帯で、北西－南東方向に A トレンチ、北東－南西方向に B トレンチと C トレンチを配し、A トレンチ南側に接して D トレンチ、さらに北西側の道路を隔てて北西－南東方向に E トレンチを設定した。各トレンチの幅は約 2 m で、2 m 四方のグリッドを設定した。A～E トレンチの調査面積は約 213 m² で、グリッド単位で層序を把握しながら調査が進められた。

宇土市教育委員会では、出土遺物や調査日誌等の調査に関する記録物を検討し、プライマリーな層序と認定できる D トレンチ及び A トレンチ南半部付近の土層堆積状況に基づき A～D トレンチの基本層序を設定した（宇土市教育委員会 2008）。また、E トレンチについては、調査の結果、土層の堆積状況及び主体となる出土遺物の時期が異なるため、A～D トレンチと区別した。

A～D トレンチの基本的な層序は、I～VI 層に区分される。I 層は表土層（耕作土）及び攪乱層である。II 層は黒色や褐色の混土貝層及び混貝土層で、中世以降の改変を受けており、弥生～中世の遺物を包含する。III 層は厚さ約 20～40 cm のマガキやハマグリ等の純貝層で、阿高式を主体とする土器が出土しており、当該期に形成された貝層とみられる。IV 層は褐色土層で轟式土器が数多く出土している。V 層は黒色土層で、IV 層と同様に押型文土器や塞ノ神式土器、轟式土器等、縄文時代早期から前期の土器のみが出土している。VI 層は基盤層のローム層である。



第14図 轟貝塚第6次調査トレンチ配置図 (宇土市教育委員会 2008)



第15図 轟貝塚第6次調査トレンチ基本層序 (宇土市教育委員会 2008)

Eトレンチの基本的な層序は、I～VI層に分けることができる。I層は表土層（耕作土）及び攪乱層で、

Ⅱ層はハマグリやハイガイ等を包含する混土貝層で、土色は黒褐色を呈する。上下2層に細分でき、上層のⅡa層は貝が少ないのに対し、下層のⅡb層は貝が多く含まれており、Ⅱb層で縄文後期とみられる埋葬人骨が3体出土している。Ⅲ層は縄文後期に形成されたとみられるマテガイやアゲマキ等を含む純貝層で、約5～30cmの厚さで堆積しており、部分的に混貝土層を挟む。Ⅳ層は暗褐色の混土貝層で、炭化物を多く含んでおり、鐘崎式土器や北久根山式土器が出土している。Ⅴ層はやや赤みを帯びた暗褐色の混土貝層で、Ⅳ層と同様に縄文後期の遺物を包含する。Ⅵ層は基盤層とみられる黄ばみを帯びた赤褐色粘土層である。

②検出遺構（写真4）

縄文時代の遺構として、土壇墓、住居跡、配石遺構を検出している。このうち、土壇墓については、Aトレンチ2体、Bトレンチ2体、Eトレンチ3体の計7体の縄文時代の埋葬人骨が出土した。

1号土壇墓（1号人骨）は、Aトレンチ21・22グリッド褐色土層中で検出。仰臥屈葬で、遺存状態は良好。左腕がアカガイ製、右腕がベンケイガイ製の貝輪を装着していた。また、直腸・結腸・大腸付近より黄褐色を呈する食物残渣が確認され、30匹近いマイワシ・カタクチイワシ・ハゼ等の骨が含まれていた。2号土壇墓（2号人骨）は、Aトレンチ21グリッドの混土貝層と褐色土層の間で検出。仰臥屈葬の熟年女性人骨が埋葬されていた。頸骨周辺でイモガイやアマオブネの巻貝製の貝玉が多数出土したことから、貝製首飾を装着した状態で埋葬されたとみられる。3号土壇墓（3号人骨）は、Bトレンチ3グリッドで仰臥屈葬とみられる性別不明の老年人骨が出土。5号土壇墓（5号人骨）は、Eトレンチ3グリッドで検出。中世の土壇墓（4号人骨）の下部に位置し、年齢は10代前半とみられるが性別は不明。6号土壇墓（6号人骨）は、5号土壇墓と同じく4号土壇墓の下部で検出されたいが、詳細については不明である。7号土壇墓（7号人骨）は、Bトレンチ7グリッド黒褐色土層で検出。埋葬体位は横臥屈葬で、頭部を西側に向けている。8号土壇墓（8号人骨）は、Eトレンチ3グリッドで検出され、5号人骨直下において横臥屈葬の老年女性とみられる人骨を検出した。

③出土遺物（第16・17図）

本調査における出土遺物の総数は膨大で、木製コンテナ（10×40×80cm）180箱、総数は小破片まで含めると約27,000点あまりにのぼる。縄文時代を中心とするが、弥生時代から中世までの遺物も比較的多く出土しており、その多くは土器である。縄文時代においては、早期から後期末までの幅広い時期の土器が出土しており、なかでも轟式や阿高式、鐘崎式、北久根山式等、縄文時代前期から後期までの土器が大半を占める。

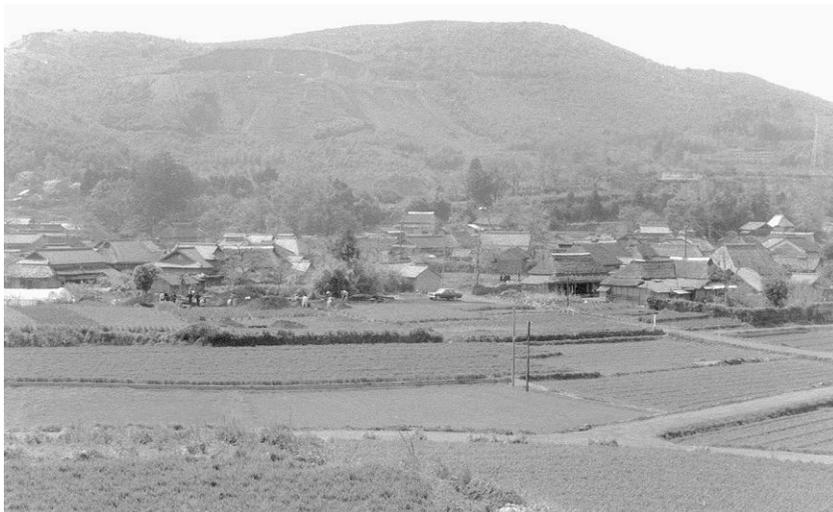
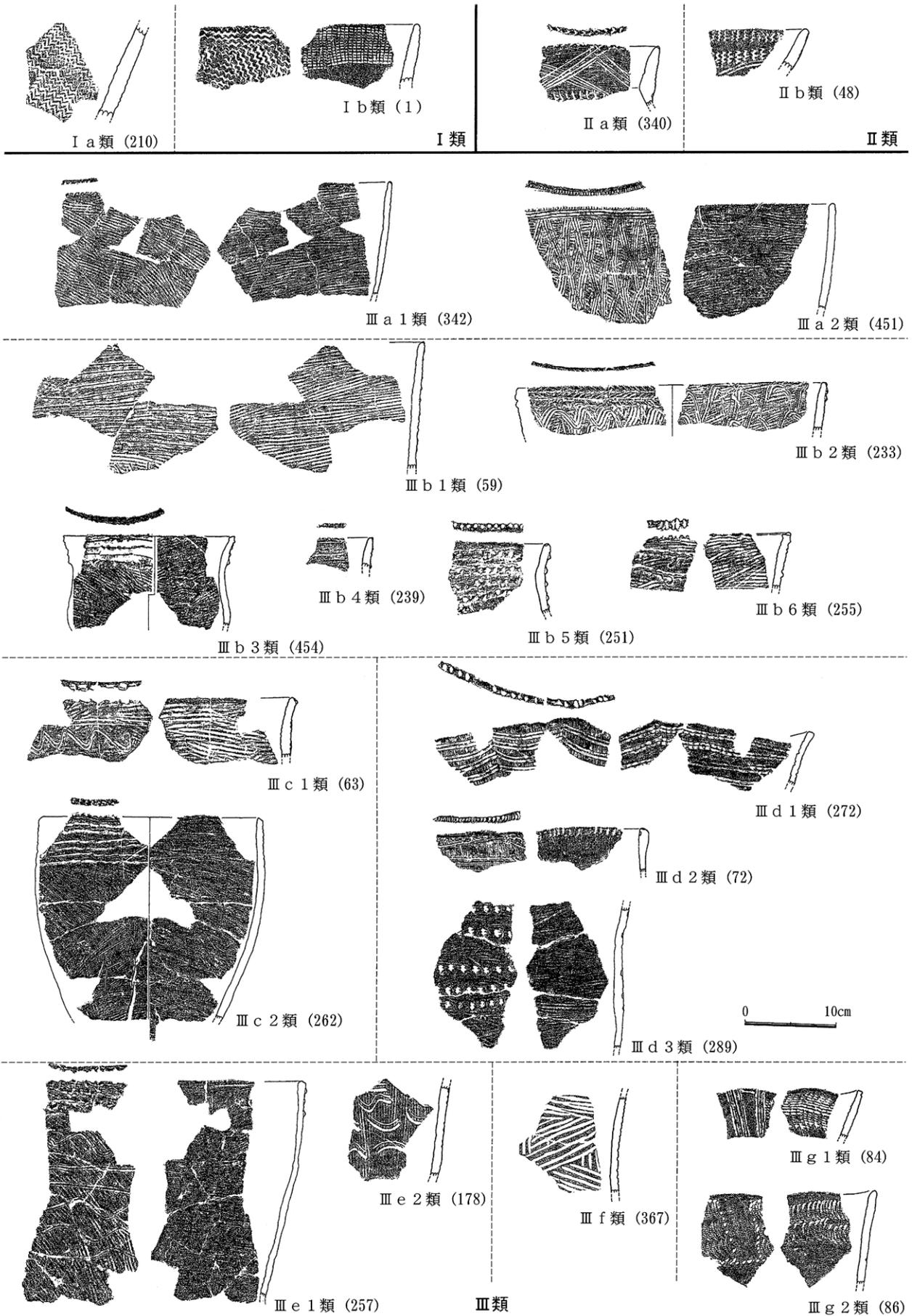


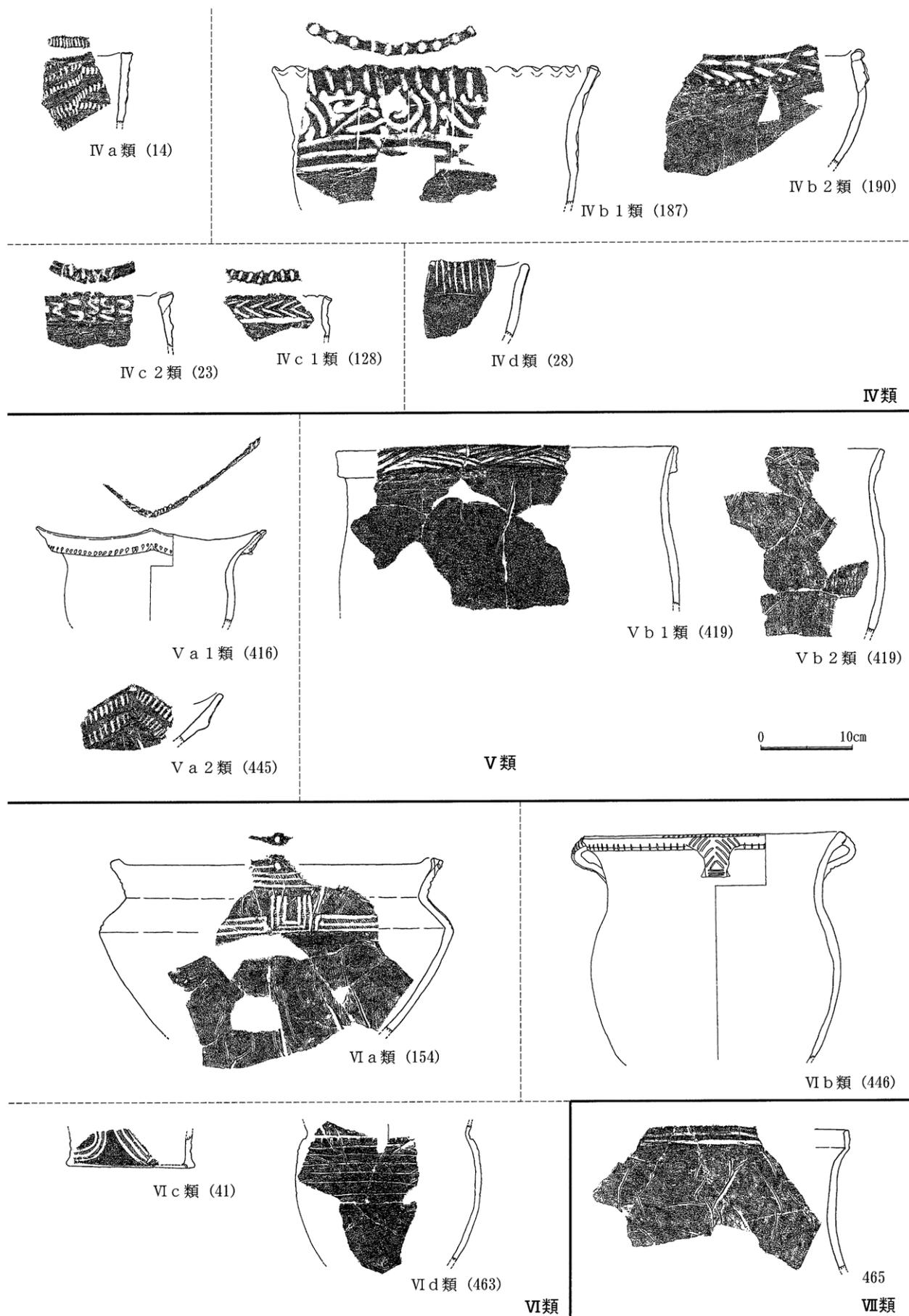
写真3 轟貝塚第6次調査状況遠景（東より）



写真4 1号土壇墓（1号人骨）



第16図 轟貝塚第6次調査出土縄文土器分類図1 (宇土市教育委員会 2008)



第17図 轟貝塚第6次調査出土縄文土器分類図2 (宇土市教育委員会 2008)

これらについては、器面調整や施文技法、文様等により、Ⅰ類：押型文系土器群、Ⅱ類：貝殻文系土器群（塞ノ神式）、Ⅲ類：轟式系土器群（轟式・西之菌式・野口式・曾畑式・尾田式）、Ⅳ類：阿高式系土器群（並木式・阿高式・南福寺式・出水式）、Ⅴ類：市来式系（貝殻条痕文系）土器群、Ⅵ類：磨消縄文系土器群（鐘崎式・北久根山式・福田K2式・西平式）、Ⅶ類：黒色磨研土器群（御領式）に分類され、さらにこれらは細かく分けられる。

土器以外では、石器や骨角器、貝製品が豊富に出土した。石器は、石鏃、石匙、削器、磨石・敲石、石斧、石錘等で、骨角器は筭や骨製刺突具、貝製品はフネガイ科のアカガイやサルボウ等の二枚貝を利用した貝輪や貝製首飾（貝玉）等がある。

④動物遺存体

各トレンチで貝類遺体や脊椎動物遺体が出土した。特にEトレンチの混土貝層や純貝層では数多くの脊椎動物遺体が出土しており、AトレンチからDトレンチにかけての貝層下の褐色土層（基本層序Ⅳ層）や黒色土層（同Ⅴ層）でも比較的多くの動物遺体が出土した。第6次調査では貝層のブロックサンプリングや水洗選別は行われておらず、これらの出土資料は調査時に任意に取り上げられたとみられる採集資料である。

出土した脊椎動物遺体種は、魚骨、獣骨、哺乳類である。A～Dトレンチにおいて轟式土器が数多く出土した褐色土層やその上層の阿高式土器を包含する縄文中期に形成されたとみられる純貝層、Eトレンチの純貝層等から出土した脊椎動物遺体は次のとおりである。

魚類では、軟骨魚綱のサメ類、アカエイ科/トビエイ科、硬骨魚綱のフグ科、ハタ科、マダイ、クロダイ属、スズキが出土した。また、鳥類ではタカ科、哺乳類では、イルカ類、クジラ類、イヌ、ニホンジカ、イノシシが出土した。イノシシとニホンジカでは遊離歯および鹿角を除き、破片数、最少個体数ともにイノシシの方が多く出土しており、イノシシ、ニホンジカの両方とも頭部、中軸骨、四肢骨が出土していることから、解体は遺跡周辺において行われたと推測される。

また、貝類遺体は、腹足綱と二枚貝綱に大別される。前者では、イシダタミ、スガイ、ウミニナ、フトヘタナリ、カワアイ、ツメタガイ、ゴマフダマ、レイシガイ、アカニシ、テングニシ、パイ、ミガキボラ等があり、後者は、クマサルボウ、ハイガイ、マガキ、ヤマトシジミ、アサリ、ハマグリ、チョウセンハマグリ、オキシジミ、カガミガイ、オオノガイ等がある。

(3) 調査の成果について

A～Dトレンチ周辺のプライマリーな堆積状況を示すとみられる地点の層序は、基盤層直上に黒色土層が形成され、その上位に褐色土層が堆積しており、両層からは轟式系土器群が数多く出土している。その上層である純貝層では阿高式系土器群が出土し、下層の黒色土層や褐色土層では皆無とよいう状況から、出土資料をみる限り阿高式系土器群の段階に純貝層が形成されたと想定される。なお、純貝層上層の混土貝層及び混貝土層では、弥生から中世までの幅広い時期の遺物が出土しており、埴輪の出土から古墳が築かれていたことや、中世居館に伴うとみられる横堀跡の存在から、後世の改変が比較的広い範囲におよんでいたとみられる。また、Eトレンチ検出の純貝層は、貝殻条痕文系土器群（市来式）やの磨消縄文系土器群（北久根山式、鐘崎式等）が出土する後期の貝層と考えられ、A～Dトレンチ検出の貝層と形成時期が異なることが判明した。

これらを総合すると、遺構は未発見であるが、縄文時代早・前期段階では集落は既に存在していたとみられる。中期の阿高系土器群の段階には確実に貝塚が形成され、続く磨消縄文系土器群の時期である後期にも貝塚西側に貝層が形成されたことが明らかとなった。直接的な生活痕跡は確認できないものの、時期が新し

くなるにしたがって轟貝塚が立地する台地のなかでも先端部の標高の低い方から山側の高い方へと遺跡内の生活場所の移動があったとみられる。隣接する西岡台貝塚との関係では、西岡台貝塚の貝層が2つに大別され、下層では轟・曾畑式等の前期の土器を主体とするが、阿高式や船元式等の中期の土器が含まれており、上層は出水式や北久根山式、御手洗式等の後期前半の土器を主体とする（宇土市教育委員会 1985）。この下層の貝塚が轟貝塚の阿高系土器群が出土する貝層、上層が貝殻条痕文系土器群や磨消縄文系土器群が出土した後期の貝層に対応する可能性を指摘した。

なお、第5次調査では、Iトレンチ第4層で轟式土器を包含する10cmの厚さで堆積する貝層（大部分はハイガイで、それにカキ、アカガイ、ハマグリ等を含む）が報告されており（松本・富樫 1961）、江坂も阿高式の時期の純貝層（本報告の基本層序Ⅲ層）下の一部に「轟式後半のハイガイの多い薄い貝層」（江坂 1971）の存在を指摘したが、慶応大学から得た本調査の実測図や日誌、写真等の記録物からは、この轟式段階の貝層を特定することができなかった。このため、宇土市教育委員会 2008 では、前期の貝層が存在する可能性も考慮すべきであることを指摘したが、宇土市教育委員会が貝塚中心部で行った第12次・13次調査において、轟C式・D式に伴う前期後葉の貝層を確認した（第4章参照）。

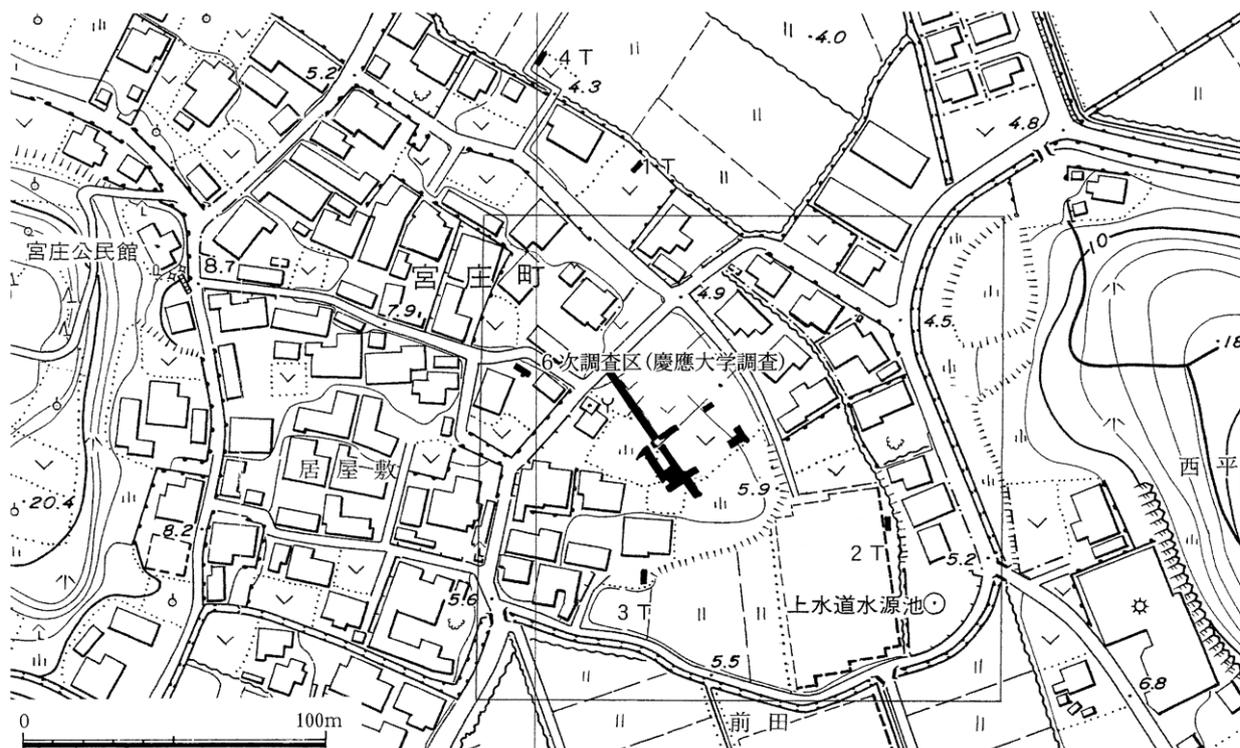
また、Aトレンチでは人骨が近接して検出されているが、本地点周辺の第1～3次調査で人骨が多数確認されていることから、轟貝塚が位置する台地東側は前期を主体とする墓域の可能性を示した。

第5節 平成期の発掘調査

第1項 第7・8次調査

(1) 調査に至る経緯

宇土市内遺跡範囲確認調査事業の一環として、平成16・17（2004・2005）年度の2ヵ年にわたり宇土市教育委員会が第7・8次発掘調査を実施した。当該調査では、過去の調査成果から貝塚中心部の様相については、



第18図 轟貝塚第7・8次調査トレンチ配置図1（宇土市教育委員会 2006）

器や瓦質土器、白磁、木器等が出土した。

なお、上記で検出した混貝土層は、破碎状態のものが多くを占めており、本来は貝層を形成していたものが流れ込み等で二次的に堆積したものとみられる。貝類の同定を目的としたブロックサンプリングで、腹足綱のヘタナリ、フトヘタナリ、ウミニナ、イボウミニナ、タマキビ、マルテンスマツムシ、アカニシ、イボニシ、スガイ、二枚貝綱のマガキ、ハイガイ、ハマグリ、オキシジミ、ヤマトシジミが出土した。

縄文土器を包含する混貝土層（1 Tの10層、2 Tの11層）の花粉分析の結果、堆積当時は周辺にカシ類（コナラ属アカガシ）やシイ属—マテバシイ属を主体とする照葉樹林が分布していたと考えられ、部分的にエノキ属—ムクノキ、クリ等の落葉樹、マツ属、スギ等の針葉樹も生育していたと推定される。また、林縁等にはイネ科、ヨモギ属等の草本類が生育していたとみられる。

第7・8次調査で得られた結果から、轟貝塚における貝層の範囲は、貝塚が立地する西側から東側に向かって舌状に派生した台地の先端部、南北約80～100 m、東西約70～80 m、標高約6～8 mの範囲内に限定される可能性が高いことを指摘した。その周辺の標高約4 m前後の畑地や水田は、縄文時代当時、現在より標高が数m低く、縄文時代以後の沖積作用によって土砂が堆積し、現在の地形を形成したとみられる。調査で検出した混貝土層は、その堆積過程によって形成された土層と推定される。

第2項 第9～13次調査

平成23～25（2011～2013）年度にかけて、貝塚周辺における縄文時代の集落跡（居住域）の所在確認のための調査を実施した。貝塚の北側から北西側・西側にかけて計7か所のトレンチ調査を行ったが、一部のトレンチから若干の遺物が出土した以外は、縄文時代の集落を示唆するような痕跡は発見されなかった。

また、平成26～28（2014～2016）年度にかけて、貝塚中心部の堆積状況の確認と過去の調査の再検証を目的として、第1～3次・6次調査地点周辺で発掘調査を実施した。その結果、第2次調査区の下層で、早期から前期の遺物包含層と集石遺構、焼土を伴う土坑等、縄文時代早期末から前期にかけての生活痕跡を確認するとともに、当該期の人骨計5体が出土した。以上の調査の詳細は、本書にて報告する。

第6節 まとめ

第1項 石器時代人種論と大正期の調査

明治期から大正期における日本人類学の主要な課題の一つとして、我が国の石器時代人の実態解明があった。日本における先住民がアイヌ民族か、またはアイヌの口碑伝説に登場する「コロボックル」という民族かという議論（アイヌ＝コロボックル論争）や、後来と考えられていた日本民族がどこから来たのかという内容等について盛んに議論された。「轟貝塚の発見者」とされる佐藤の報告（佐藤1899）についても、その記載内容からこの議論を念頭に置いていたものとみられる。

当時、坪井正五郎が主張した「コロボックル説」と小金井良精や鳥居龍蔵らが唱えた「アイヌ説」が対立したが、坪井が大正2（1913）年に亡くなった後は、アイヌ説が全盛をむかえるような状況にあった。アイヌ説が主流となるなか、濱田耕作、清野謙次、長谷部言人らはこの説に反論し、日本列島における人種間の闘争や交替を否定して石器時代から現在にいたる日本列島における人種の連続性を主張した¹⁶⁾。

つまり、大正期における轟貝塚発掘調査は、この時期の石器時代人種論が調査の背景にあったことは、当時の中心的論者であった清野、濱田、長谷部の他、轟貝塚において初めて発掘調査を行った鈴木文太郎等、当時、我が国を代表する考古学者や人類学者達が3年という短期間に立て続けに轟貝塚の発掘調査を実施している事実からも首肯できよう¹⁷⁾。

このように、大正期の轟貝塚における調査の主目的は古人骨の蒐集であったが、第2次調査に関しては「日本近代考古学の父」といわれる濱田が携わった調査にふさわしく、人骨の配置状況や遺物の出土層位、後に轟式土器や阿高式土器と呼ばれることとなる縄文土器の分類とその特徴にまで言及しており、この時期に実施されたものとしては極めて緻密な調査と評価できる。特に、「二尺余りは密実なる貝殻の層をなし、其以下は黒土層」という轟貝塚において層序の記述や貝層の存在と貝種を具体的に報告した点は重要である。

また、長谷部を中心とする第3次調査は調査報告書が未刊行であり、これまで調査地点や人骨の出土位置等の基本的な内容が不明であったが、宇土市教育委員会の資料調査によって、京大において図面や出土遺物等の関連資料を新たに確認したことは大きな成果である。今後、京大や東大に所蔵されている出土人骨の年代分析や食性分析等の科学分析を実施することにより、墓域の変遷や食性等を通じた縄文時代の生活環境の復元につながることを期待される。

第2項 昭和期から平成期までの発掘調査

日本石器時代人の人種に関する研究の過熱を背景として、出土人骨の蒐集に重きがおかれた大正期の調査に対し、戦後に実施された第5次調査は、九州における縄文早・前期を考えるうえで重要な土器型式である轟式土器の分類や編年の位置付け、曾畑式土器との関係を明らかにすることを目的とした調査が行われた。貝塚の中心部である台地の堆積層の状況がほぼ把握され、IトレンチやVIトレンチ等の台地南側付近で遺存状態が比較的良好であることが明らかとなった。また、調査者の松本雅明は、轟式土器を型式学的に分類し、出土層位に基づき年代的な位置付けを明示しており、現在に至る轟式土器研究の基礎的な論考となっている。

本調査において特に重要な点は、層位的な発掘調査により層序と出土した縄文土器との対応関係のある程度把握することができたことがあげられる。本調査で最も原初の状態をとどめるとされるIトレンチ第2層は阿高式のみが出土するカキを主体とする純貝層、第3層は混土貝層、第4層はハイガイを主体とする貝層、第5層は純黒土層の計5層に分層され、第3層以下では阿高式は出土していないとする（松本・富樫 1961）。以上の調査成果によって、轟貝塚の形成過程や轟式土器の実態解明を目指す機運が高まったと評価され、江坂輝彌を中心とする第6次調査が実施される大きな契機となったと考えられる。

第6次調査も層位的な発掘調査によって層序と出土した縄文土器との対応関係が明らかになるとともに、貝塚の東側と西側では基本的な層序が異なることが判明した。A～Dトレンチの基本層序Ⅲ層は、マガキやハマグリ等の純貝層で、阿高式を主体とする土器が出土しており、中期後葉に形成された貝層であり、第5次調査Iトレンチ第2層と対応するとみられる。その下層の基本層序Ⅳ・Ⅴ層では多量の轟式土器が出土するとともに、押型文土器や塞ノ神式土器等、縄文時代早期から前期の土器のみが出土することが明確となった。また、Eトレンチの基本層序Ⅲ層は市来式や北久根山式、鐘崎式等が出土する縄文後期に形成されたとみられるマテガイやアゲマキ等を含む純貝層であり、後期においても貝層が形成されていたことがわかった。このことから、住居跡の遺構は未発見であるが、貝層形成前の縄文時代早・前期段階には既に集落が存在し、中期の阿高系土器群の段階には確実に貝塚が形成され、続く磨消縄文系土器群の時期である後期にも貝塚西側に貝層が形成されたことが明らかとなった。

また、大正期の調査以来、約半世紀ぶりに縄文人骨が出土したことも大きな成果といえる。なかでも、Aトレンチ21・22グリッド褐色土層中で検出した1号土壙墓（1号人骨）は、直腸・結腸・大腸付近より黄褐色を呈する食物残滓が確認され、30匹近いマイワシ・カタクチイワシ・ハゼ等の骨が含まれていた。当時の食性を知る具体的資料であり、発掘調査において発見されたものとしては、我が国における最初の発見例とみられる。

第7・8次調査によって、轟貝塚の貝層の範囲が南北約80～100m、東西約70～80m、標高約6～8m

の範囲内に限定される可能性が高いことが明らかとなった。その周辺の標高約4 m前後の畑地や水田は、縄文時代当時、現在より標高が数m低く、縄文時代以後の沖積作用によって土砂が堆積し、現在の地形が形成されたとみられる。

第3項 過去の調査からみた今後の課題

轟貝塚においては、明治期の学界における報告を嚆矢とし、大正期以降、13次にわたる調査が行われ数多く成果が得られており、我が国の縄文時代の歴史を解明するうえで極めて重要な貝塚であるが、今後明らかにすべき課題も多い。主なものとして、居住域と集落構造の把握、貝層の分布範囲と形成時期、出土人骨の時期や墓域の範囲と変遷である。

居住域と集落構造の把握については、これまで貝塚遺跡として古くから注目されてきたが、住居跡等の集落の存在を確実に示す遺構がほとんど検出されていない。これまで検出された住居跡は、第6次調査Cトレンチ15グリッドの攪乱層の下で検出された方形プランとみられる後期末に比定される住居跡のみである。居住域と集落の全体構造を把握するために、貝塚形成前や形成時の居住域やその変遷を遺構及び出土遺物の様相から明らかにする必要がある。

貝層の範囲と形成時期については、これまでの調査から貝層のおおまかな分布範囲を推定することは可能であるが、第5・6次調査によって中期後葉から後期に貝層が形成されたことは確実となったものの、貝層の規模や時期、変遷等については不確定な点が多い。特に、貝塚の初現については、第5次調査の第1トレンチ第4層の貝層（ハイガイ主体）からは轟式土器が出土しており、第6次調査において江坂氏も阿高式の時期の純貝層下の一部に轟式後半のハイガイの多い薄い貝層の存在を指摘（江坂1971）しており、両調査では前期にさかのぼる貝層の存在が示唆されているものの、やや具体性に欠ける点があったため、第6次調査の報告書では、前期の貝層が存在する可能性も考慮すべきであることを指摘するにとどめている（宇土市教育委員会2008）。加えて、トレンチ調査が主であるため、時期ごとの貝層の範囲を絞り切れていない点あげられる。第2・3次調査は、比較的広く面的な調査が行われたが、第3次調査の詳細は不明であり、第2次調査においても出土した貝類の種類の記事にとどまっている。

出土人骨の時期や墓域の範囲と変遷については、これまでの調査により数多くの縄文人骨が発見されており、学史上重要であるが、その大半が大正期の調査で出土したものであり、時期が不明確という課題がある。清野による人骨の検出状況の詳細な記録は特筆されるが、出土土器との対応関係や墓域の検出層位が明確ではない等の問題があった。近年、山田康弘らの研究グループが第2次調査の年代測定を実施し、早期末葉から後期までの幅広い時期の人骨が含まれることを明らかになったが（山田・日下・米田2019）、今後はこのような科学分析とあわせて、出土層位や土器との対応関係等の考古学的方法に基づいて人骨の時期を決定するとともに、墓域の変遷を明らかにする必要がある。

轟貝塚における発掘調査史や明らかにすべき主な課題等は以上のとおりである。これらを踏まえて、宇土市教育委員会では、文化庁や熊本県、宇土市重要遺跡保存活用検討委員会の指導助言を受けながら、第9～13次調査を実施した。その調査内容の詳細や成果については、第3章から第8章に掲載した。

註

- 1) 宇土市教育委員会2008において、大正期から平成期に行われた轟貝塚の発掘調査を整理し、それぞれ調査次数を付した。本書においてもこれを踏襲する。
- 2) 濱田耕作は、「肥後轟貝塚調査報告」（濱田・榊原・清野1920）の附記において、長谷部言人による調査で「人骨約二十体及び遺物若干を発見」と報告しているが、実際の出土数はもっと多かった可能性がある。詳細については、本

章第3節第3項及び付編1-3を参照。

- 3) 木崎康弘は轟貝塚の存在を示す最初の報告と指摘し、佐藤を「轟貝塚の発見者」としている（木崎 2015・2017）。なお、京都帝大の報告書（濱田・榊原・清野 1920）において、濱田は「本貝塚の学界に現れしは何時に始まれるか。或は言ふ、明治十四年の頃モールズ博士の踏査を経たりと。未だ其の確たるを知らざる」と記述している。
- 4) 佐藤と連名で「野中完一」の名もあるが、野中は東京帝国大学発行の『日本石器時代人民遺物発見地名表』の第2版（1898年）と第3版（1901年）を編集した人物であり、明治31（1898）年から翌年にかけて熊本を訪れたと考えられている（木崎 2017）。
- 5) 京都帝大による2回の発掘調査（轟貝塚第1次・第2次調査）で出土した人骨は、京大理学研究科自然人類学研究室に収蔵されており、人骨の採取地点もほぼ特定できる。
- 6) 鈴木が轟貝塚を調査するに至った経緯や経過については、木崎康弘が清野謙次の記述（清野 1922, 清野 1925 に再録）に基づいて詳細にまとめている（木崎 2017）。
- 7) 鈴木は、「坪井博士はコロボツクル説を唱へ、小金井博士は之れに反しアイノ人説（同氏著「日本石器時代の住民」明治三十七年東京春陽堂発行）を唱へられたり、されど両者の所論を見るに未だ首肯に足るものなきを遺憾とす、就中体形的人类学の方面に於ける小金井博士の当時を見るに、僅かに上膊骨、大腿骨、脛骨の三種の長大なる肢骨に於ける計測に基き、一方諸家の所説を引用し論拠を構築せられ、考古学上アイノ人の石器使用者たるを力説せられたり。要するに是れ主としてコロボツクル説に抗弁するの爲めならんなりと雖も、独りアイノ人の石器使用を是認するのみを以てしては、未だアイノ人先住の立論上毫も効果を認むべからず、必ずや同時に日本人祖先の石器使用の有無を決定するの要なかるべからず、然るに其事なきが如し、今若し現日本人の祖先の石器使用を否定するの立証確固となるに至れば、求めずしてアイノ人先住説の成立を見るべきものとす、然らざれば石器の果して孰れの民種に属するかの判定をして不可能ならしめ、コロボツクル説の架空なると同じく、アイノ説も亦其論拠の極めて浅弱なるを覚ゆる」と主張した（鈴木 1917b）。
- 8) 第2次調査から2年後の大正10（1921）年に刊行された宇土郡役所編『宇土郡誌』の「轟村」に関する記述のなかに轟貝塚の記載がある。新聞報道以外の轟貝塚に関する県内の記録資料の初出とみられる。本資料には、轟貝塚の規模や出土遺物等の記載とあわせて京都帝大の調査に関する記述が掲載されている。「近来瀕繁に斯道の学者来り多大の研究資料を発見せり」との記述から、当時、鈴木や濱田、清野ら京都帝大をはじめとする研究者が調査を行ったことや、調査で多数の遺物が出土したことが地元ではよく知られていたと考えられる。
- 9) 濱田は、「人骨三体を得られたる」とするが、これは第1次調査出土の2体に加えて、調査前に川上漸と山崎春雄が轟貝塚の踏査中に貝層から発見した人骨が含まれていると推測される。なお、清野によれば、大正8年10月、鈴木とともに調査を行った川上漸（当時、慶応大学医学部）に対し、清野が轟貝塚の調査を行いたいと打診。これを受けて川上が慶応大学助教授岡本寛雄（熊本県出身）を同地に派遣し、地主と交渉して濱田や清野らによる調査が実現したという（清野 1925）。
- 10) 写真1の図面は、調査報告書（濱田・榊原・清野 1920）に未掲載のものであり、第8図はそのトレース図（宇土市教育委員会作成）である。所蔵先の京大文学部考古学研究室の許可を得て掲載した。
- 11) 第2次調査出土の縄文土器については、轟B式を宮本一夫、轟B式以外を水ノ江和同が再整理し、報告している（宮本 1990, 水ノ江 1990）
- 12) 出土した玦状耳飾（耳介に穴をあけて垂下装着する耳飾の一種）は、京都帝大による報告書の「巻首図版」に掲載された（付編2-3参照）。なお、本資料は九州における初めての報告例とされている（下村 2010）。
- 13) 写真2の図面は京大文学部考古学研究室に所蔵されており、第10図はそのトレース図（宇土市教育委員会作成）である。所蔵先の許可を得て掲載した。

- 14) 江坂輝彌は、轟C式・轟D式を曾畑式土器に後続する土器として位置付け、轟A式・轟B式と轟C式・轟D式の直接的なつながりを否定している（江坂 1966）。また、松本・富樫 1961 の実測図には、轟C式1類や轟C式3類のなかには、塞ノ神式や尾田式が含まれていることがわかる。
- 15) 調査の組織（所属及び役職は当時）は、調査団長：伊豆富人（熊本日日新聞社社長）、副団長：島田四郎（熊本日日新聞社専務）、主査：江坂輝彌（慶応大学文学部専任講師）、副査：松本雅明（熊本大学教授）・乙益重隆（熊本女子大学教授）・賀川光夫（別府大学教授）、客員：坂本経堯（肥後考古学会会長）、調査員：麻生優（國學院大学講師）・池水寛治（鹿児島県立出水高校教諭）・伊藤圭二（熊本大学助手）・小片保（新潟大学教授）・小片丘彦（新潟大学助手）・金子浩昌（早稲田大学考古学研究室）・河口貞徳（鹿児島大学講師）・隈昭志（県立山鹿高校教諭）・鈴木重治（別府大学講師）・杉村彰一（山鹿高校教諭）・富樫卯三郎（宇土高校教諭）・渡辺直経（東京大学助教授）・渡辺誠（慶応大学）、作業員：慶応大学・國學院大学・別府大学・京都学芸大学・宇土高校の学生、特別参加：高宮広衛（沖縄大学助教授）・金元竜（ソウル大学教授）と日韓の研究者や全国各地から多数の学生が参加するおおがかりな調査となった。
- 16) 清野は統計的手法を駆使し、石器時代人とアイヌの距離は現代日本人と石器時代人の距離よりも大きいとし、アイヌ説を否定した（清野 1925）。また、石器時代人には地方差があっても形質的には一種族であり、いくつかの民族が混血して形成されたと主張した。また、長谷部は石器時代人アイヌ説を否定して日本人の起源が石器時代に遡るとし、石器時代以来の体質の変化は生活様式の変化が大きいと主張した。後に清野の説は「混血説」、長谷部の説は「変形説」と呼ばれた。
- 17) 1910年代から1920年代には、考古学者や人類学者による古人骨の蒐集が全国各地で盛んに行われた。その代表的な遺跡として、大阪府藤井寺市国府遺跡や岡山県笠岡市津雲貝塚、愛知県田原市吉胡貝塚等があげられ、いずれも数多くの縄文時代人骨が出土した。古人骨の発掘をめぐる轟貝塚と同じようなことが国府遺跡でも繰り返されており、大正6（1917）年に濱田を中心とする京都帝大の発掘調査を皮切りとして、そのわずか2ヶ月後には、東京帝大の鳥居龍藏が発掘調査を行う等、大正10（1921）年までの約4年間に計9回の発掘調査が行われ、計72体の人骨が出土したという。